

2009年度 活動事例一覧(応募受付順)

No.	活動名称	応募者名称	都道府県	掲載頁
1	“ひまわりの町” 北竜の挑戦！ ～あなたの笑顔が見たいから～	若年認知症家族会 空知ひまわり	北海道	3
2	認知症にカンバイ！ ～地域の居場所で、輝く人生を～	NPO法人 さわやか徳島 地域の居場所 幸せの家・ありがとう	徳島県	4
3	ゆかた・帯の寄付のお願い	浦安市健康福祉部介護保険課	千葉県	5
4	誰でもが安心して暮らせる街に ～小樽市高齢者懇談会「杜のつどい」の市民後見人活動～	小樽市高齢者懇談会「杜のつどい」	北海道	6
5	手づくりおもちゃ幼老共遊教室	森 依頭(校舎の無い学校)	徳島県	7
6	世代間交流の試み・キッズヘルパーたちの挑戦	認知症ケア研究所 デイサービスセンターお多福	茨城県	8
7	認知症になっても安心して暮らせる伊万里をつくろう	伊万里地区 認知症の人とその家族の会 通称「ひまわり会」	佐賀県	9
8	地域と共に生き活きと暮らす ～認知症発症者が主になり運営する朝市・地域食堂～	デイサービスセンター侶	香川県	10
9	医療・保健・福祉の得意分野を生かした実践チームが地域で活躍	南魚沼市福祉保健部福祉課	新潟県	11
10	「認知症買い物セーフティネット」普及事業 - 認知症になっても安心して買い物ができる地域づくり -	NPO法人 HEART TO HEART	愛知県	12
11	やってみっぺよ地域づくり「高齢者見守り隊」始動！！	福島県いわき市平地域包括支援センター	福島県	13
12	ネットワーク形式(杉並方式)で「介護者の会」を運営する試み ～介護者の心に寄り添える「介護者の会」を目指して～	NPO法人 杉並介護者応援団	東京都	14
13	人と人をつなぐ、人とまちをつなぐ、「まちのえき」 ～豊かな交流が認知症を防ぐ？～	NPO法人 山口せわやきネットワーク	山口県	15
14	「認知症を支える活動へICT(情報通信技術)の活用」 ～こころ豊かなシニアライフと地域活動活性化にむけて～	光市認知症を支える会(福寿草の会)/NPO法人シニアネット光	山口県	16
15	楽しく作って、わいわい食べる！ 認知症の方も楽しく活動するお料理サロン	かけひさろん	東京都	17
16	アニマルセラピー＆音楽セラピー	NPOリトルハンド	和歌山県	18
17	大人のお手軽地域デビュー作戦！！	川越市地域包括支援センター連雀町	埼玉県	19
18	日常支援から災害対策まで - 地域ぐるみの取り組み -	習志野市谷津西部まちづくり会議	千葉県	20
19	認知症の方と共に歩み、共に生きる研修会 ～“吹きだまり”の研修～	吹きだまり	愛媛県	21
20	地域ぐるみで取り組む、高齢者の SOS に届く見守りネットワーク	おおた高齢者見守りネットワーク	東京都	22
21	認知症の理解から住民参加のまちづくりをめざす羽後町の取り組み	羽後町地域包括支援センター	秋田県	23
22	地域社会の認知症患者のセーフティネット維持の取り組み	大野 篤志	栃木県	24
23	地域人材育成(笑いと認知症の理解を地域に広めよう)	有限会社 エーデルワイス	北海道	25
24	地域福祉の根起こしを地域の人たちとともに始めよう	社会福祉法人正和福祉会そよかぜの杜/ 在宅介護支援センターと認知症について語る会「さつき会」(ボランティア団体)	佐賀県	26
25	その人らしさを中心に置くケア ～もっと自分らしく楽に生きていきたい～	NPO法人 認知症を正しく知る会「もっとらくっと」	山梨県	27
26	おでかけ SUN 倶楽部	NPO法人北海道外出支援センター	北海道	28
27	介護事業所の有志の職員が立ち上げた「かまくら認知症ケア研究会」の取り組み	かまくら認知症ケア研究会	神奈川県	29
28	かまくらりんどうの会 20年の軌跡	かまくらりんどうの会	神奈川県	30
29	認知症高齢者を地域で支えるために	島根県益田保健所	島根県	31
30	判断能力が低下しても安心して暮らせる町に	NPO法人シニアメイトサービス	東京都	32
31	なじみある地域で安心して過ごせる「もう一つの我が家づくり」	社会福祉法人 桜井の里福祉会 生きがい広場地蔵堂	新潟県	33

32	話・輪・笑って開催「しおかぜ会」	「しおかぜ会」	神奈川県	34
33	「認知症の家族のつどい」～どンドン広がる輪～	下関市認知症を支える会「キャッチボールの会」	山口県	35
34	特定非営利活動法人 みつわ	宅幼老所 笑びす	佐賀県	36
35	特定非営利活動法人PASネットの活動	NPO法人PASネット	兵庫県	37
36	特定非営利活動法人シビルブレインの活動	NPO法人シビルブレイン	大阪府	38
37	だれもが不自由なく旅を楽しむ観光バリアフリーをめざして	岩浦 厚信(宮崎市バリアフリー検討委員会 元事務局担当)	宮崎県	39
38	地域の人、認知症の利用者の人も、共に活動する「生き生きサロン」	NPO法人シルバーサービス憩いの汀	三重県	40
39	お互いに助け合える地域づくり 有償たすけあいシステム コープおたがいさま まつえ	おたがいさままつえ	島根県	41
40	トラベルヘルパーの外支援助活動	NPO法人日本トラベルヘルパー協会/株 SPIあえる倶楽部	東京都	42
41	佐竹台サロン	社会福祉法人 吹田市社会福祉協議会	大阪府	43
42	認知症になっても安心して暮らせる街づくり ～「お父さんごめんさい」から歩き始めた日々～	彩和グループ	埼玉県	44
43	若年認知症サポートセンター「絆や」	古都の家 学園前	奈良県	45
44	健康麻雀教室活動による認知機能低下予防事業 (いきいき健康マージャン教室)	東内 順子(NPO法人活気会)、堀川悦男(佐賀大学医学部)、十時忠秀(佐賀県医療統括監)	佐賀県	46
45	明和町に「家族会」を。	明和町介護者の会実行委員会	三重県	47
46	わが町、飯田でサポーター養成講座 そして、キャラバン・メイト地域づくりにがんばってます	飯田市上久堅まちづくり委員会 認知症疾患医療センター	長野県	48
47	共生を軸とした認知症地域支援の取り組み ～支えられる存在から支え合う力を生み出す存在へ～	NPO法人 地域の寄り合い所 また明日	東京都	49
48	熊本県における行政・関係団体・県民が一体となった認知症でもだいじょうぶなまちづくり	熊本県 健康福祉部 高齢者支援総室 認知症対策・地域ケア推進室	熊本県	50
49	認知症を受け入れるということ ～若年性認知症を抱える夫妻と支援者との出会い～	富士宮市サポートチーム / 佐野 光孝・明美	静岡県	51
50	ご近所を結ぶ「こまちゃん宅福便」	社会福祉法人 駒ヶ根市社会福祉協議会	長野県	52
51	自立と尊厳を保ち、安心して住み続けることのできる地域へ～ホスピスケアの理念を共有した「ケアタウン小平」の取り組み～	NPO法人コミュニケアリック東京	東京都	53
52	サロン・コミュニティカフェを通じた地域の支えあい、助け合い活動	NPO法人 フェリスモンテ	大阪府	54
53	お年寄りの“自分語り”に寄り添い、元気を！ - 傾聴ボランティアのめざす住みよい町づくり -	傾聴ボランティア佐賀かたらい	佐賀県	55
54	第一歩が踏み出せた！わが町も「安心して暮らせる町」に変身中	社会福祉法人江北町社会福祉協議会	佐賀県	56
55	つながれた人の輪を継続的に支援し、あきらめない地域づくり	甲府市地域包括支援センター奥湯村園	山梨県	57

活動名	“ひまわりの町” 北竜の挑戦！ ～あなたの笑顔が見たいから～
要旨	若年認知症の方が家族と共に北海道北竜町に転入されたことをきっかけに、町民が一家をサポートする家族会を結成。日々の暮らしにおいて「サポーターも一緒に楽しめる支援」に取り組んでいる。
応募者	若年認知症家族会 空知ひまわり 事務局 中村 道人
連絡先	〒078-2512 北海道雨竜郡北竜町字和11番地の1 北竜町役場 住民課内

(概要)

平成19年8月、東京より若年認知症のご家族(Nさん一家)が北海道北竜町に転入されました。その数年前に、当時現職の町長が若年性アルツハイマー病で辞任し、町民の中にも「若年認知症」に関しての認識が高まった頃でした。同年11月には若年認知症家族会「空知ひまわり」を設立し、会員はNさん一家とサポーター(北竜町民)23名で構成され、家族会がスタートすることとなりました。Nさんは日中、介護保険におけるディサービス、ショートステイ、ホームヘルプサービスを利用し、それ以外の日常生活における支援を「空知ひまわり」サポーターが、Nさん家族に様々な活動プログラム(信さん農園、パークゴルフ支援、卓球支援、陶芸支援、通院支援等)を行っております。家族会は毎月の例会を開催し、Nさんの近況報告や情報交換、会報の発行をはじめ、勉強会、各関係機関との連絡調整、介護保険サービス事業所との連絡等を行っております。活動支援のプログラムは、Nさん自身の過去の生活実態や趣味等をご家族からお聞きし、それぞれのサポーターが時間の許す範囲の中で、最初はどれもこれも「試行錯誤」「手探り」の状態でありました。最初から成功するプログラムもあれば、失敗するプログラムもありましたが、それでも1回目よりは2回目、2回目よりは3回目とサポーターの支援がなくても出来る(分かる)ことの多さに、多くのサポーターが感じているところであります。とかく認知症の方は「物忘れ」が多いのですが、それでも、何度も何度も繰り返すことで「学習能力」や「残存能力」があることが分かり、大変素晴らしいことであると実感しています。また、支援プログラムを実施している中で「新たなプログラム」(陶芸支援、ダンス支援、カラオケ支援等です)を発見することがあります。

幸い、Nさんの病気の進行は大変緩やかで、2年前に北竜町に来られた時とさほど変化がないように思います。今後もNさんの「笑顔」を見られる支援プログラムを考え、何よりも、「サポーターも一緒に楽しめる支援」に取り組んでいきたいと考えています。

認知症は「誰にでもなり得る病気」です。ともすれば「自分だけ良ければいい」という考えになりがちですが、人の「心の痛み」や「ちょっとした支援」、或いは「見守り」だけでも、その方々にとって「安心・安全な生活をおくれること」であり、言い換えれば「普通に生活出来ること」が、どれだけ大切なことなのか、まだまだ社会の中には浸透されていません。高齢化が進行する時代にあって、若年認知症のみならず、認知症になる方の割合は増加傾向にあります。特別に「何をする」のではなく、対象となる方々の出来ない部分を少しでも補ってあげる事で、安心した生活は実現出来ると思います。

作付け面積日本一の「ひまわりの里」を中心とした町づくりを推進する小さな町、北竜町ですが、町民1人1人が明るく「ひまわり」のように心豊かな生活が出来るよう、町全体(地域全体)が1つの施設となって取り組んでいけるよう、組織の1つとして「空知ひまわり」は支援体制を構築しているところであります。今後とも、町民の誰もが心安らげる生活が実現出来るよう、また、その輪が日本全国に広がっていくよう期待したいです。

2009 - 2

活動名	認知症にカンパイ！ ～地域の居場所で、輝く人生を～
要旨	(応募者の希望により掲載を控えさせていただきます)
応募者	NPO 法人さわやか徳島 地域の居場所 幸せの家・ありがとう
連絡先	(応募者の希望により掲載を控えさせていただきます)

(概要)

報告書発行時点で書類のとりまとめが完成せず、
応募者の希望により掲載を控えさせていただきます

活動名	ゆかた・帯の寄付のお願い
要旨	市のアンテナ職員制度より事業化された活動。浴衣の寄付を募り、夏祭りで認知症高齢者に着てもらうことで、昔の楽しい記憶をひき出し、精神的安定に役立てる「回想法」の効果を目指して実施。「若返った」と笑顔で思い出を語り合う姿がみられた。
応募者	浦安市健康福祉部介護保険課給付係 藤平 孝行
連絡先	〒279-8501 千葉県浦安市猫実 1-1-1

(概要)

浦安市では、先進的・ユニークな取り組みをしている国内外の自治体、民間企業、各種団体などから、本市に有益な情報を収集・研究活動を行う「アンテナ職員制度」を平成19年度より実施しております。この制度は、市職員が収集した情報を、最初に市長が目を通し、事業化検討などの指示を直接出すことが特徴となっており、平成21年8月末日現在までに121件の提案があり、13件が事業化されています。

その「アンテナ職員」からの提案により事業化された事業の一つが、「ゆかた・帯の寄付のお願い」です。

この事業は、市内の特別養護老人ホームやグループホーム等の介護施設に入所している認知症高齢者等の方々に、地域や施設で開催される夏祭り等で着ていただくための浴衣や帯の寄付を募り、施設に贈呈することにより、浴衣を着て夏祭りに出かけた懐かしい・楽しい記憶を思い出し、ご入所者の皆さんで思い出話を互いに語り合い、共感し合うことで脳を活性化し、認知症状の緩和や精神的安定に役立てるといふ「回想法」による効果を期待した取り組みです。

提案のきっかけは、施設訪問を行うなかで、認知症状の重度化により会話も少なく無表情で椅子に腰掛けられているご入所者の方々を見て、「笑って欲しい」と思ったことが始まりです。

昔懐かしい・楽しい思い出話をするとき、誰もが自然と笑顔になり、記憶をたぐり寄せながら話をするとします。浴衣には、花火大会や盆踊り大会などの懐かしい、楽しい「思い出」が詰まっているのではと考えたと同時に、私たちのなかでは、夏に浴衣を着て夏祭りに出掛けるという当たり前にある機会を、施設に入所する皆さんにも、「日本の夏の風物詩」として味わっていただきたいとの思いで提案したところ、事業化されたものです。

「回想法」は、1960年代にアメリカの精神科医ロバート・バトラー氏により提唱され、昔の記憶を、会話などを用いて脳に再度蘇らせ、自分の人生を振り返り、満足感や充実感を得ることで、精神的安定を図りQOLの向上に繋げるといふ、特に高齢者向けの精神療法として実施されております。

他市では、大正時代に建てられた建築物を「回想法センター」としてオープンし、回想法のノウハウをもつリーダー等がサポートしながら、高齢者が設定されるテーマをもとに思い出話を語り合うなど、回想法による取り組みは、全国各地で実施されております。

浦安市で実施しました浴衣に限らず、懐かしい生活用品やおもちゃ、古い建築物や昔よく聴いた音楽といった、ちょっと探せば意外に身近にあるもので思い出話を語りあうことなどができると考えております。

活動名称	誰でもが安心して暮らせる街に～小樽市高齢者懇談会『杜のつどい』の市民後見人活動～
活動主旨	高齢化がすすむまちで、高齢者を中心に発足した高齢者懇談会が自分たちの生活は自分たちで守らなければならないという思いから、市民後見人活動に着手。研修・視察を経て、今後の本格的な活動に向けた研鑽を積む一方、市民後見のネットワークづくりを地域に広げるべく、行政とともに「市民後見人活動センター」の設置に尽力している。
応募者	小樽市高齢者懇談会「杜のつどい」 副会長兼事業部長 若西 カナ子
連絡先	〒047-0032 北海道小樽市稲穂2丁目17-1

(概要)

私たちの会は2005年4月に、高齢者を中心に街の活性化と、家から出て人と交わり健康的な活動することを目標に発足し、「にぎわい」「ふれあい」「健康」「情報」「ビジネス」の5つのグループに分かれて活動を始めました。約100名の会員が友達などに声を掛けて広め会員はどんどん増えてきました。サロンの集まりから、学習講座、教養講座、技術的な講座、パソコン講座などが誕生し、全体行事として、敬老の日の健康を祝う会や、年末の餅つき大会をメインにお楽しみ会などが会員外の参加も募って行なわれました。世代間交流、文化の継承、就学前の子ども対象の子育て支援、環境づくり、植樹、地域の祭りなどイベント参加、登下校の子供の安全を見守る活動など社会貢献活動も多く企画されるようになりました。

2007年度に行政の「市民後見人養成講座」を知り、実施団体として名乗りをあげました。高齢化率は30%に近く、産業が無く若者の流出に歯止めのかからない人口減の街にとって、将来にわたって自分たちの生活は自分たちで守らなければならないという覚悟が必要です。「杜のつどい」の会員が年々倍増する様子は、その意識の現われに他ならず、独居高齢が目の前にあって抛って立つところが欲しいという意識が根底にあると感じるのです。

会員数は500人を突破し、今は元気で数年後の対策は考えて行かねばならないと多くの人が考えている時でしたから、成年後見制度を支える市民後見人という必要性を理解できました。講座の講師は、地元在住の弁護士や司法書士など成年後見を受任している専門家が引き受けて下さり、その熱心な講座を受講することで、成年後見制度の認知度を上げるための活動と更なる勉強の必要性を受講生は理解しました。

2008年には、2007年に続いてWAMの助成を受けることが出来、年間を通じての活動予定を組むことが出来ました。啓発活動として多くの市民に聞いてもらうべく、敬老の日の祝賀イベントに参加すること、アトラクションとしての劇を作ること、祝賀会対象外の市民には劇とパネルディスカッションのシンポジウムを開くことを計画しました。シナリオを作り、劇団を組織して練習し、チラシを会員が近隣に手渡しや投げ込みをするなどの活動を通じて、後見制度をより身近に意識できたと思います。「とてもよく分かった」「もっと勉強します」などの積極的な感想が多かったのが印象的です。出前講座として劇団が地域に出かけたりもしました。

市民後見人養成講座は、第1回目の基礎講座と、第1回目、第2回目の受任をテーマにした実践講座を行ないました。第1回目の実践講座修了生の有志で、「小樽市民後見人の会」を組織し、成年後見に関する第1次の問題整理を主眼とした成年後見相談を行なうことになりました。力を向上するための自主勉強会も行なうことになりました。

勉強することで、制度があってもそれを利用し権利を擁護する現実にはなっていないことも分かってきました。必要とする人が確実に増えているのに制度利用に結びつかない現状を変えていかなければなりません。行政の体制としてもまだ整っていませんが、私達が活動することで少し動きが出てきました。市民後見人が実際に活動するには、クリアしなければならないことが多くあります。2009年1月、小樽の高齢化率はついに30%を超えました。障害者福祉法、虐待防止法、孤独死、見守りの必要性、ネットワークなど、新たなテーマも出てきました。地域で生活するのは認知症者だけでも、高齢者だけでもありません。若い人を含めて誰もが暮らしやすい社会を作るには自分たちが何をすればいいのか、何ができるか、何をしなければいけないのか、少しずつ考えて少しずつ実行して行こうと思います。

活動名	手づくりおもちゃ幼老共遊教室
要旨	生涯学習グループの高齢者ボランティアが、「グループ回想法」を世代間交流の場で行った経験を経て「校舎の無い学校」を立ち上げ、「手づくりおもちゃ幼老共遊教室」活動を開始。「遊び」や「遊び心」の蘇生を核とするまちづくりを実践している。
応募者	森 依顕（校舎の無い学校）
連絡先	〒779-3301 徳島県吉野川市川島町川島 438-1

（概要）

1) 活動の特徴

認知症の老人・幼児親子・コミュニティ - 「人間の三世代モデル」の視点から、「遊び」をパスポートとした世代間交流活動の相乗効果によって「認知症でもだいじょうぶ」町づくりに貢献。

活動のリーダーは、認知症サポーター、地域アニメーター。活動開始は、平成18年4月1日。活動人員は、45名(老人15名、幼児親子15名、校舎の無い学校ふるさと教員15名)。活動場所は、地域の特養ホーム。活動の頻度は、毎月1回の「手づくりおもちゃ 幼老共遊教室」活動と補足活動として、毎週1回特養ホームの認知症グループへ友愛訪問。

2) 活動を始めたきっかけ、目的、具体的内容

生涯学習「回想法」まちづくり・コスモスの会の老人ボランティア達は、8年前より地域の老人を対象とした「グループ回想法」の実践を通して、思い出語りから紡ぎだした生活文化の伝承を世代間交流の場で試みてきました。その実践活動の過程で、伝統的な「遊び文化」の伝承が、老人・子ども・親の三世代交流を軸として多世代交流まちづくりに貢献できる可能性に気がきました。そこで、「校舎の無い学校」を立ち上げ、「手づくりおもちゃ幼老共遊教室」活動を始めましたが、手応え十分。三世代交流の遊び教室では喜びと感動の渦が巻き起こっています。

この教室を開くきっかけとなったのは、我国の老年学の第一人者で回想法を我国に導入した先達の一人、黒川由紀子博士の論文「高齢者臨床におけるケア - 遊び、笑い、色 - 」に出会ったことに端を発します。この論文は、日米の心理学、社会学、文化人類学、社会福祉学、医学、政治学、倫理学等の専門家が、約20名合宿して、朝から夜遅くまで発表と討議を重ね、「Who cares?」という幻の本を出した中の一章を共同執筆したものでした。本の題名「Who cares?」の意味は、「誰がケアを担うか」というまじめな意味に「そんなこと、誰がかまうもんか」という隠し味があり、「綺麗事を語ってもしょうがないぞ」というユーモラスなメッセージが込められているとのことでした。

論文には、「子どもの臨床における『遊び』の重要性は、広く認知されている。『遊び』が重要なのは子どもに限らない。どの時代のセラピーにおいても、遊びや遊び心は重要な鍵になる。高齢者臨床におけるケアに関しても『遊び』をいかにとりいれるか、一人ひとりの高齢者の遊びを深めること、そのための場を創り出し、遊び感覚が自由にのびのびと表出されるための援助を行なうことは、きわめて重要である。」と論述があり、これを読んだ、ふるさと教員のリーダーは児童ケースワーカーとして児童施設や大学等での実践歴40年のキャリアがあったので、自らの活動を振り返り、「ああそうか」と膝を打って「遊び」や「遊び心」の蘇生を援助する場づくりを決意しました。従来の校舎の有る学校や老人施設の中では、「遊び」が失われ、感動体験に飢えていることを知っていたので、瞬く間に町全体をキャンパスとする「校舎の無い学校」を立ち上げ、「手づくりおもちゃ幼老共遊教室」を開きました。教室活動では、幼児は、老人が注ぐ喜びと慈しみのまなざしに応えるように子どもらしく、生きいきと、老人と共に遊ぶ姿は、感動を呼び起こしました。

活動名	世代間交流の試み：キッズヘルパーたちの挑戦
要旨	小中学生がキッズヘルパーとしてデイサービスの活動に参加。子供達のやりたいことを生かしつつ、認知症高齢者に関わることで高齢者の力を引き出している。また、子供だけでなくその親にも認知症の理解が広がっている。
応募者	認知症ケア研究所 デイサービスセンターお多福 高橋 克佳
連絡先	〒310-0841 茨城県水戸市酒門町 4637-2

(概要)

社会保障・人口問題研究所の人口統計資料集2007年版では、2005年の総世帯数に対する3世代家族(65歳以上の高齢者が世帯主である直系3世帯以上)の割合は8.0%と低く、小中学生に代表される子供たちが、認知症を含む高齢者の生活と接する機会がきわめて限定されていることが報告されています。わが国でもいくつかの自治体で世代間交流を目的とした事業が行われていますが、認知症高齢者の理解を目的とした地域活動はわが国ではきわめて乏しいのが現状です。

NPO法人認知症ケア研究所デイサービスセンターお多福では、一定の条件を満たした小中学生にキッズヘルパーとして土・祝日や夏冬春休みを中心に、デイサービスセンターお多福の活動に参加してもらい、高齢者と子供達が共に同じ時間を過ごし、子供たちが高齢者に対して、子供なりの視線で高齢者と関わり、高齢者も同じように子供たちと関わる時間を作ることを通して、世代間交流の機会を増やし、認知症の有無にかかわらず子供たちの高齢者に対する意識や態度の変化が、子供たちと高齢者の双方にどのような影響をもたらすかを検討するために2007年にキッズヘルパーの試みを始めました。デイサービスセンターお多福でのキッズヘルパーは単なるボランティア、お手伝いではありません。一人一人の目標に沿った仕事をしてもらい、疑似通貨ですが、報酬も得ることができます。このことは大きな特徴といえます。

職員から説明された決まりや約束事を守りながらキッズヘルパーは、高齢者と関わっていきます。認知症に対する説明は、この後、子供たちから彼らの親に対する説明を通して、認知症高齢者の対応について親の世代も浅い内容ですが理解することに広がりました。これは、キッズヘルパーの取組後に分かったありがたい副産物です。

また、子供たちは、当センターで必ず高齢者と関わらなくては、一日を過ごすことができません。自ら主体的に働きかけをしようと思えば相手の話や希望に耳を傾けなくてはなりません。聴くこと伝えることという相互関係が不可欠になります。子供たちと高齢者は、お互いの話を真剣に聞こうとしています。一時もじっとしていられなかった若年性認知症の人が、子供たちと遊ぶときだけは椅子に落ちて座り、目を細めながら子供たちの話に耳を傾けたり、混乱のひどい高度のアルツハイマー病の女性が、職員の子供をちゃんと抱いて見事な子守唄を歌う様子、なかなか仲間に加わろうとしなかった女性の利用者が子供たちにせがまれて輪に加われるようになるなど、びっくりするような様子がしばしば起こります。子供たちの意識の変化も含めて、一定の成果は得られていますが、このような子供たちと利用者のコミュニケーションは定量化することができません。さらに今後、子供たちと利用者のやりとりの具体的な逐語記録とその時の状況の記録を積み重ねることが必要であり、重要と考えています。

活動名	「認知症になっても安心して暮らせる伊万里をつくろう」
要旨	介護者同士がお互いの悩みや情報を共有しようと家族会を発足。認知症サポーター養成講座を地域で主体的に展開して認知症に対する理解を広め、県内でダントツのサポーター養成を実現し、介護相談会の定期開催で介護者同士の交流の場を確立した。
応募者	伊万里地区 認知症の人とその家族の会 通称「ひまわり会」 事務局 黒川 憲一
連絡先	〒848-0027 佐賀県伊万里市立花町 1542-16 伊万里市市民交流プラザ内

(概要)

1. 伊万里地区認知症の人とその家族の会「ひまわり会」の紹介

「ひまわり会」は、認知症の人を抱えた家族が介護の方法や悩みについて、お互いに話し合い情報を交換し、共有しながらみんなで介護について考えようと、平成11年2月に発足しました。平成19年には、佐賀県が開催した「キャラバンメイト養成研修」に参加して、地域の人の認知症に対する理解を深め一人でも多くの認知症サポーターを養成することが、認知症の人や家族が安心して暮らせる町づくりの近道と考え、認知症勉強会活動を開始しました。また従来からの介護相談も、今年から開催回数を増やし電話相談と併せて行なっています。ここ数年のうちに活動も活発になり、介護施設職員、医師、看護師、ケアマネジャー、市や社会福祉協議会、ボランティアの方々も大勢会員になっていただき、現在は100名近くの会員で活動をすすめています。

2. 認知症勉強会・・・認知症サポーター養成講座の開催

老人クラブ、婦人会、民生・児童委員会などを対象に、市内各地域（公民館など）に出向いて開催。今後は学校や事業所などでの勉強会も開催していきます。特に介護経験豊富な会員と地域の人たちとの交流が、認知症に対する理解を深めるのにおおいに役立っています。

平成19年から21年8月までに、34回開催し延べ1125名のサポーターを養成しました。

3. 介護相談活動・・・「介護の悩みいっしょにかたろう会」

認知症介護で苦勞し一人で悩んでいる家族が、同じような経験者と交流し、介護の悩みや情報を共有することでストレスを発散し、少しでも元気になれる場として毎月開催しています。

平成20年までは不定期に年2～3回の開催でしたが、21年度からは毎月定例的に開催し、皆さんが参加しやすいようにしました。併せて介護相談専用電話も設置して対応しています。

21年5月から毎月第2水曜日に開催し、8月末現在24名の方が参加されました。

4. その他の活動

- ・会報「ひまわり」の発行（年2回）活動レポート「ひまわりレポート」の毎月発行。
- ・地域ボランティアグループとの交流・コラボレーション（春・秋のイベントへの参画）

5. 今後の展望

- ・認知症勉強会の活動を事業所や学校にも展開。そのためのテキストやカリキュラム作り。
- ・認知症勉強会で得られた地域の方との繋がりを活かして介護相談活動の充実をはかり、より多くの介護で悩んでいる方々の力になりたい。
- ・地域あるいは市レベルでの認知症介護のネットワーク構築や、各種ボランティア活動のネットワーク化の、中心的役割を果たせるようになりたいと思っています。
- ・介護保険や医療の問題などを、家族や本人の立場でもっと勉強し、発言していきたい。

活動名称	地域と共に生き活きと暮らす ～認知症発症者が主になり運営する朝市・地域食堂～
活動要旨	「多くの人と出遭い、誰かと共に食事をする喜びを味わってもらいたい」との思いで、高齢者施設にて週1回、朝市や地域食堂を開催。認知症の施設利用者や若年性認知症のボランティア達が主に運営し、リピーターも多く、事業そのものも定着しつつある。
応募者	デイサービスセンター 侶 城丸 聖平
連絡先	〒761-0123 香川県高松市牟礼町原 216-5

(概要)

小規模な高齢者福祉施設において、朝市や地域食堂を開催している。認知症を発症した利用者や若年性認知症のボランティアの人たちが主に運営しており、その役割は、食材の確保や調理、代金の受け渡しなど留まるところを知らない。朝市は、施設利用者が近隣の畑で栽培した野菜や地域住民が売って欲しいと持ち寄った花や野菜を地域住民に向けて販売するもの。その開催に合わせて建物の一部を地域食堂として開放している。主なメニューはうどん。うどんのトッピングは、その日の利用者の話し合いで決まるが朝市で持ち寄られた果物やお漬物が付け加えられることもあり、リピーターが多く事業そのものも定着しつつある。

(活動の成果と今後の展望)

数値的に示すとすれば、介護度の改善が挙げられる。

これら事業を開始した後に更新認定を受けられた方達のうち、72歳の男性は介護度3から介護度1に、83歳の男性は介護度5から介護度3に改善された。

しかし、我々は介護度が改善されたその原因こそが本当の成果である、と考えている。畑仕事をした事がなかった人も、うどんを手作りした経験のなかった人も「やってみたい」と思うことができれば出来る。必ず出来るようになる。そして、出来た時に「もう一度やりたい」と思うような支援があれば、どんどんその人の生活は広がり始め介護度も改善する。認知症の発症者自身がそう思えるようになり、生き活きと生活できるようになる事こそが本当の成果である。

また今後の課題として我々がこの朝市や地域食堂に望む事は、これら事業の収入が利用者やボランティアに還元できるようにする事である。朝市や地域食堂の週1回の開催における売上は3万から5万。少しずつ地域に認知され、リピーターもいる。もちろん保険制度のしぼりの中で現金を給料として支払う訳にはいかないが、ご本人や家族がその人の存在意義を見い出せるきっかけとしてその売り上げを活用したいと考えている。そして、全国に3万人以上いるといわれている若年性認知症発症者や認知症の発症により働くことを諦めざるを得なくなってしまった人達の収入面での不安を解消すべく、これら事業の必要性を制度に訴えていきたいと考えている。

活動名	医療・保健・福祉の得意分野を生かした実践チームが地域で活躍
要旨	認知症・うつ・自殺の予防対策事業を市の保健課・福祉課が一体となって立ち上げ、医療・保健・福祉の得意分野を生かした実践チームを設置。認知症への関心が高まり、介護者の交流会や新たな家族会の発足など地域が大きく動き出している。
応募者	南魚沼市福祉保健部福祉課 長谷川 まり子
連絡先	〒949-7392 新潟県南魚沼市浦佐 1188-2

(概要)

始まりは平成19年4月、市立病院の院長(精神科)を中心に「認知症、うつ、自殺予防対策会議」を保健課と福祉課(地域包括支援センター含む)で立ち上げたことからである。月1回の会議で現状の把握、課題の整理、具体的な対策、事業の実施と評価を行ってきた。認知症対策は福祉課でも重要な課題と思いつつも「認知症予防講演会」と「予防教室」の開催にとどまっていた。「認知症地域支援体制構築等推進事業」の募集にはすぐに応募することになった。

南魚沼市は新潟県中越地区の山間地域で人口6万1千人余り、高齢化率は26%を超えている。古くから保健医療福祉の連携がとれ、地域のボランティア活動も盛んである。また、介護保険関係事業所との連携も比較的良好に取れていて、それらを生かした取り組みを考えた。

平成19年第1回の「認知症地域支援体制構築等推進事業」セミナーには参加できず、その時の演習シートが送られてきて、それを生かし、キャラバン・メイト養成を兼ねて保健課、福祉課の専門職と関係職員で演習を行った。「市に求められていること」「市の実態の点検」「市の目指す姿とは」など話し合い、合言葉「いきいき生きがい あたたかい支えあい 認知症になっても地域で笑顔」を作成した。予防活動、早期発見、早期治療、質の高いケア、地域の支えあい、そして住み慣れた地域で笑顔で暮らし続けられることを目指すことになった。

事業はプロジェクトメンバーで11グループ設置し、そこに関係のある介護サービス事業所職員やボランティアなどからなる実践チームを設置し、企画・実施をした。その目的は、多角的に事業を実践するためと、かかわることでチーム員が成長することである。認知症サポーター養成は保健課、福祉課の専門職全員がメイトになり、関りの多い団体から養成していった。今後、地域密着型サービスの認知症対応型事業所にもメイトとして、事業所周辺の老若男女のサポーター養成を進めていく予定である。徘徊SOS模擬訓練は地域密着型範囲の地域で開催し、介護サービス事業所職員も企画、参加した。地域包括支援センターの主任介護支援専門員チームはセンター方式の研修、社会福祉士のチームは虐待防止と権利擁護の地域の啓発、介護サービス事業者やボランティアは地域資源マップ作成、保健事業の推進は一次予防として重要なことを再確認し、早期発見・治療にはかかりつけ医の役割が大きいことから、保健と福祉課職員が分担して医療機関を訪問し、研修会の案内や早期発見と連携のマニュアルを配布し、県主催のかかりつけ医研修が当市会場で開催できた。市主催の早期発見の研修会には医療機関の医師・相談員・看護職などの参加があった。

成果として、地域の人や関係者が認知症について高い関心を持ってきていることで、平成21年7月9日開催した「若年性認知症の妻と生きる」の講演会には、予想を遥かに超えた市民と学生・専門職の参加があった。また、自主介護者の交流会が発足したり、市立ゆきぐに大和病院では若年性認知症の人と家族の会が発足したり、地域が大きく動き出していることを実感している。

活動名称	「認知症買い物セーフティネット」普及事業 - 認知症になっても安心して買い物ができる地域づくり -
活動要旨	日常生活に欠かせない“買い物”を通して、買い物安心マークを普及することにより地域の中で認知症の人と家族を見守る支援のネットワークをつくる取り組みを行っている。
応募者	特定非営利活動法人 HEART TO HEART 尾之内 直美
連絡先	〒477-0034 愛知県東海市養父町北堀畑 58-1

(概要)

日常生活に欠かせない“買い物”を通して、買い物安心マークを普及することにより地域の中で認知症の人と家族を見守る支援のネットワークをつくらうという取り組みです。

<きっかけは介護中のスタッフの声>

NPO 法人 HEART TO HEART は、認知症の人と家族の会愛知県支部の世話人と福祉医療関係者が中心となって平成 16 年に発足しました。年々深刻化する認知症に対して、家族の会のボランティア活動だけでは支援の限界があるため、それを側面からサポートし、より充実した支援につなげていくことを大きな目的としています。家族の会と連携しながらの活動のため、NPO のスタッフは介護経験者も多くいます。

スタッフ会議の中で、「押し入れにいっぱいになった化粧品の山でおかしいと気づいた」「目を離すとすぐにどこかに行ってしまうので、一緒に買い物していてもヒヤヒヤだ」「店員さんが声をかけてくれて助かった」という買い物トラブルの話から、「認知症になるとこんなことが起きることをもっとみんなに知ってもらいたい」「何か目印があるといいのに」という声が出たことがきっかけになり、お店や地域の人に、

(1)「認知症になると買い物トラブルが生じやすい」ことを知ってもらう

(2)「それを理解して接して欲しい、協力して欲しい」ということを伝え、

地域で認知症の人を見守るシステムを作ろうという取り組みが始まりました。その方法が下記です。

買い物トラブルに対する知識や理解を得るための「DVD・冊子」を作成し、認知症の勉強会や講演会などを通してお店や地域の人へ配布する。

今認知症を理解し取り組みに賛同し協力してもらえるお店には、お互いの目印として「買い物安心マーク」を張ってもらう、マークが張ってあるお店を増やし、どこでも安心マークが張ってある地域づくりへの取り組みを通して、地域の中に「認知症買い物セーフティネット」の機能を構築していく。

<取り組みの流れ>

(1)「買い物部会」の発足(NPO 法人内) - 介護経験のある人などに呼び掛け、冊子・DVD 作成・啓発のための学習会などに携わってもらえるボランティアを募集し「買い物部会」を組織しました。

(2) 東海市に「買い物セーフティネット」の提案と協力の依頼 - 市民協働課、保健福祉課・商工労政課・社会福祉協議会との支援連携のもとで取り組みを実施していくことを了解し合いました。

(3) 実態調査の実施 - 認知症の人と家族の会愛知県支部にアンケート調査を依頼し、買い物の実態調査を行いました。

(4)「実行委員会」の発足 - コミュニティ・老人会・家族会等関係者が集まり、地域の中で取り組みを進めて行く核となる「実行委員会」を発足しました。

(5)「意見交換会」の発足 - 大型スーパー・商工会議所・家族など実際に買い物に携わる人どうしが情報交換する場として「意見交換会」を発足しました。

(6) 買い物安心マークの決定 - 目印となるマークを新聞・市の広報・ホームページなど公募にて募集しました。採用作品には 5 万円の副賞

(7) 買い物安心マークの決定 - 学識経験者・市長・マスコミ関係者等にマーク選考委員をお願いし、選考委員会にてマークを選考決定しました。

(8) マークの発表および認知症講演会の開催 - マークの表彰式を行い、認知症のことを知ってもらうための講演会を開催して、地域の皆さんに取り組みをお知らせしました。この講演会は認知症サポーター養成講座として実施し、オレンジリングの普及も合わせて行いました。

DVD・冊子の制作 (完成 21 年 12 月) - 介護経験のあるボランティアが集まり認知症の人の買い物トラブルについて知ってもらうための、DVD・冊子の作成を行っています。冊子は、子どもたちにも分かりやすいように全ページマンガで作っています。

多くのお店や地域の人に普及できるよう、東海市においてキャラバンメイトを養成し、認知症サポーター養成講座とタイアップして普及啓発活動を進めていきます。

活動名	やってみっぺよ地域づくり「高齢者見守り隊」始動！！
要旨	「地域の課題は地域で解決する」を基本に、地域コミュニティ再生に向けた取組を地域包括の主導で開始。地域ニーズと市の保健福祉計画をすり合わせ、地域の課題解決の取組みとして高齢者見守り隊が立上がり、活動も住民主導へシフトしている。
応募者	福島県いわき市平地域包括支援センター 吉野 優子
連絡先	〒970-8686 福島県いわき市平字梅本 21 市役所本庁舎内

(概要)

<はじめに>

いわき市は、福島県の浜通り南部に位置し面積約1231km²、平成21年6月1日現在で人口351,414人、高齢化率24.07%の中核市です。平成18年4月、いわき市直営で7ヶ所の包括支援センターが誕生。翌年4月、非営利活動法人「地域福祉ネットワークいわき」が設立。いわき市から包括支援センター業務の委託を受け、直営7ヶ所での運営をそのまま引継いで業務展開しています。包括支援センターは「地域包括支援体制」の実現を目指した機能を有する機関でもあります。当平地域包括支援センター管内での、住民・包括支援センター・社会福祉協議会・行政による「高齢者が安心して住みなれた地域で暮らしつづけるための地域コミュニティづくり」の取り組みを紹介します。

<いわき市平下平窪地区高齢者見守り隊発足までの経過>

平窪地区 地域ケア会議開催：平成20年3月25日～平成21年2月18日

目的 - 「地域の課題は地域で解決する」ことを基本に、地域における課題を協議し住民自らが解決に向けて取り組みことができることを目指し、地域におけるケアシステムをつくる。

見守りネットワークの関心が高く、ネットワーク構築に向けて具体的に協議を進めることで合意。

あんしん見守りネットワーク活動事業（高齢者見守り隊）発足に向けての協議：平成21年7月9日～9月9日 活動開始に向け、活動内容等確認 地区回覧による「協力員募集」

結団式開催：見守り隊協力員パッチ等の交付 意識啓発を目的に「認知症サポーター講座」実施

<活動の成果>

今まで市の中でも、高齢者の暮らしを考えるためのアンケート調査や地域福祉懇談会等を開催し様々な意見の集約をしてきたが課題解決に向けた具体的な取組の実現までには至らなかった。地域コミュニティ再生に向けた取組を、当初包括支援センター主導で開始し、行政の動きを視野に「地域ニーズといわき市第5次保健福祉計画」をうまくマッチングできたことで活動の第一歩を踏みだせた。現在は地域住民が活動の主体となり、包括支援センター・行政が側面的支援を行っている。

<おわりに>

コミュニティ崩壊が叫ばれているが、地域でなければ見えないニーズがある。身近な人達の「声かけ見守り」から早期に要援護高齢者の発見ができ、早期対応ができることで介護予防が可能となる。今回、当包括支援センターは地域コミュニティ再生に向けてのコンセプトを 地域を動かす起爆剤となる 地域が持つ力を見抜く 地域に出向き、人と人、人と機関をつなぐことの3点を念頭に置き、地域活動を展開してきた。高齢者見守り隊はスタートしたばかり、この活動が下平窪地区に住んでいる方々に広く浸透しご近所同士の声かけ見守りが自然にできる。更には、昔ながらの「結い」のようなちょっとした支え合いができる活動へと展開していけることを目指したい。

活動名称	ネットワーク形式(杉並方式)で「介護者の会」を運営する試み ～介護者の心に寄り添える「介護者の会」を目指して～
活動要旨	区が開催した「介護者サポーター養成講座」の修了生らが杉並介護者応援団を立ち上げ、行政や専門機関の方、また地域住民の方々と協力しながら、介護者の会の運営とネットワーク化の支援をするなどの活動をおこなっている。
応募者	特定非営利活動法人 杉並介護者応援団 土屋 洋子
連絡先	〒168-0065 東京都杉並区浜田山 2-13-1

(概要)

平成17年秋、杉並区が家族介護者を支援するボランティアを養成するための「介護者サポーター養成講座」を開催。講座修了生が、18年3月に杉並介護者応援団(以下「応援団」という。)を結成した。同時期に、主に認知症の方の家族介護者を支援するために、区が地域包括支援センターを基軸に開いた介護者教室から「介護者の会」が3ヶ所立ち上がった。これら介護者の会の運営の応援のため、応援団の介護者サポーター(以下「サポーター」という。)が活動を始めた。並行して、既存の介護者家族会についても賛同を得られた会については、サポーターが参加し、家族会を地域に開く方向で、広報、啓発活動などを開始した。それまで「家族会」と呼ばれていた会は、「介護者の会」と呼ばれることとなった。

応援団は、平成18年度から3年間、杉並区社会福祉協議会の地域活動助成金を取得し、介護者向けの講演会、交流会、介護相談会及び、サポーターのスキルアップのための研修を行った。同時に介護者の会の情報交換、事例検討会を毎月1回行い、サポーターが、介護者同士、介護者の会相互のネットワークを築くためのコーディネーターとして活動することとした。

この間に行政からの支援も進み、応援団のNPO法人化を契機として、21年度からは、区の委託事業として介護者の会の継続を支援することとなった。

現在、応援団からサポーターを派遣している会は10ヶ所。介護者の会の立ち上げやサポーターの派遣を希望する地域包括支援センター(杉並区の呼称は、ケア24)が増えて来ている。

このため、行政の協力を得て毎年サポーター養成講座を開き、増員を行ってきた21年度は、区の事業である「すぎなみ地域大学」のボランティア養成講座で、「介護者応援ボランティア」(介護者サポーターと同意)の養成を行う講座の運営を受託し、修了生は応援団に入会し、サポーターとして活動することとなった。

介護者の会では、サポーターは、会の準備、進行に気を配り、参加者が十分に話しが出来るよう、気持ちが高くなってまた介護に向き合えるよう、ピアサポートを進める。介護者の会には、介護経験者、OBの参加もあり、介護や地域の情報も提供されている。必要な場合は、サポーターが専門職やケア24など専門機関へ繋ぐこととしている。参加者に傾聴し、リアルに聴いてもらえたと感じる場を提供する一方、要介護者の方が共に参加した際にも楽しんでもらえるようなプログラムとサポートする人材を準備している。

これを発展させ、「メリーゴーランド浜田山」というミニデイサロンを20年秋より開始。認知症の方本人や家族、地域住民や支援者が参加し、互いに交流を行っている。毎月1回、舞踊体操、歌唱、お茶会などのプログラムを介護者、要介護者がともに楽しみ、リフレッシュする機会を提供することで、地域の中の居場所としてのサロンが、地域資源として定着するよう、模索している。介護者の会とミニデイサロンの運営や、サポーターのスキルアップについては、研究者や専門職による研修やコンサルテーションなどを得て、これを区内の支援者や介護者の会のリーダーが集まる「介護者の会連絡会」で共有している。区内全域の介護者が自ら、介護者の会やサロンを選んで参加できるように、数と質を向上させ、行政、地域、各支援機関等との連携を図りながら、要介護者と介護者の地域支援を継続している。

活動名	人と人をつなぐ、人とまちをつなぐ、「まちのえき」 ～豊かな交流が認知症を防ぐ?～
要旨	市の中心の商店街にある交流サロン「まちのえき」では、移動を重視し、移動機器の貸出しや買い物付き添いサービス等、「タウンモビリティ」の仕組みを導入。スタッフが常駐し、さまざまな交流により、利用者は外で誰かに会える安心感を得ている。
応募者	特定非営利活動法人 山口せわやきネットワーク 神本 直樹（ほっとさろん中市「まちのえき」センター長）
連絡先	〒753-0086 山口県山口市中市町3-14 ほっとさろん中市「まちのえき」

（概要）

「Mさん花札をしようやあ」、「しょうがないなあ。今日も鍛えちゃろうかあ」、「T子さん、ぞうりの根付を作ってきてあげたよ」、「Yさん、オセロせんかね?」、「うん、やろうやろう」、「今日は耳の調子がええような。天気によるんかなあ」、「体操は何時からですか?はあ、もう少しですね。毎日やるからおかげで元気です」、「はい、これあげる。フリーマーケットで売ってね」と、皆さんの声が聞こえてくる。利用者さん同士で話をされたり、スタッフに話をしに来られたり、日々の日課として毎日寄られたり、さまざまな目的で利用されている。そのような交流の場となっているのが、ほっとさろん中市「まちのえき」だ。

1日約50人が利用されている。単なる休憩所とは違い、深く味わいのある場所となっている自信がある。開館中必ずスタッフが居り、「まちのえき」に行けば誰かに会えるので、安心感を持って利用していただいていると思う。また、保健師か看護師の資格を持った専門講師が健康チェックをしたり、健康相談にのったりする、「まちの保健室」もある。人は誰でも「自分の話を聞いてほしい」、「自分の話をしたい」という想いがあるのではないだろうか。その想いに寄り添いながら、一人一人に“ほっ”として帰ってもらえるよう心がけている。

社会との交流が豊かな人は、乏しい人よりも認知症になりにくいという調査結果もある。私自身、1日家にずっと居るだけで気が滅入ってしまう。外に出て、いろいろな人と話をしたり、そういった雰囲気を楽しんだりするのは、認知症予防にもなるだろう。そして、商店街は、さまざまな交流を生み出す絶好の場所でもある。山口市中心商店街周辺は、高齢化率が山口市の中でも高く、高齢者の一人暮らしも多いので、「誰かと話をしたい」というニーズは高いと感じている。また、商店街の雰囲気が高齢者を安心させる効果もあると思う。

しかし、商店街に行きたくても何かしらの理由で行けない人がいる。なじみのお店があっても、買いたい物があっても…。そのバリアを取り除く一つのしくみが「タウンモビリティ」だ。タウンモビリティとは、誰もが持っている「移動の権利」を保障するシステムであり、「まちのえき」では、電動カートや車いす等の移動機器の貸し出しや大学生ボランティアによる「買い物付き添いサービス」等を行っている。「移動」に目を向けることで、超高齢社会における対策が見えてくる。これまでの活動を通して、さまざまな交流が創出され、交流サロンにおけるスタッフのノウハウを確立し、山口市のタウンモビリティのしくみを創った。このような成果を上げることができたのは、「まちのえき」が繋いでくれた一つ一つの“縁”が、支え、教えてくれたからであると思う。「まちのえき」が目指しているまちづくりを実現できるよう、これからも「一期一会」の気持ちを忘れずに活動を続けていきたい。

活動名	「認知症を支える活動へICT（情報通信技術）の活用」 ～こころ豊かなシニアライフと地域活動活性化にむけて～
要旨	家族会の活動を、ICT（情報通信技術）を活用して生涯学習やまちづくりの活性化を推進するNPOが支援。家族会はNPOの指導のもと、講演資料や案内パンフレットの作成、イベントでのプレゼンテーションなどを行い、家族会活動に活かしている。
応募者	光市認知症を支える会（福寿草の会）/NPO法人シニアネット光 山下 悦子 松田 春雄
連絡先	〒743-0013 山口県光市中央 1-8-16

（概要）

光市認知症を支える会（福寿草の会光）

発足：平成15年4月1日

活動の動機、目的：

認知症の人を抱え、日夜苦勞されている家族の人を支えたいとの思いで、発足。

また、‘認知症になっても住み慣れた地域で安心して暮らせるまち’になるよう、認知症サポーターを数多く養成している。

活動：

- ・月1回 - 例会
- ・年1回 - 施設見学、家族会交流会、リフレッシュ事業、講演会、介護者わいワイ座談会
- ・随時 - 認知症サポーター養成講座、頭部の健康診断、認知症相談ホットライン

事務局 光市和田町3-10 会長 山下 悦子

TEL・FAX 0833-72-7337

NPO法人シニアネット光（SNH）

活動の動機、目的：

ICT（情報通信技術）を活用してこころ豊かなシニアライフを目指して活動します。

ICTを道具として活用することで、社会参加活動を活性化し、生涯学習の推進やまちづくりの活性化を推進します。

また、社会参加活動を推進している団体の活動支援を行います。

活動：

光市認知症を支える会の活動の効率化を図るため、ICTの活用し、家族会の講演資料作り、案内パンフレットづくり、イベントでのプレゼンテーションなどの活動を支援しています。

詳細は、ホームページをご参照ください。

<http://snhikari.cool.ne.jp/>

活動名	楽しく作って、わいわい食べる！認知症の方も楽しく活動するお料理サロン
要旨	認知症のある方が気軽に参加して調理・会食ができる地域のサロン。近所のシニア主婦が地域包括や地元スーパーの協力を得て、認知症サポーターを含むボランティアと共に運営。認知症で閉じこもりがちの方ができる作業で自信をもち、活動意欲が向上。
応募者	かけひさろん 黒澤 直子/ 梶 尚美
連絡先	amigos703@yahoo.co.jp

(概要)

「かけひさろん」は、認知症のある方に気軽に参加していただける調理・会食を目的とする発足3年目の地域のサロン活動です。「認知症」をキーワードにして、ご近所のシニア主婦の能力を活用したグループとして成長しています。

認知症で外出の機会が減り閉じこもりがちになったり、家族以外の地域の人との接点が少なくなった方や、デイサービスの利用には至っていない特定高齢者の方、高齢で独居の方に、

- ・ 定期的で自発的な外出の機会と外部の方とのコミュニケーションの場を提供する
 - ・ 楽しく語らう食事の場を提供する
 - ・ 調理と言う日常作業を通じて、できることには積極的に参加していただく場の提供をする
 - ・ 季節の味覚や彩りなど栄養バランスと視覚的な美しさのある食事（メニュー）の提供をする
- 以上の点を目的として、ケア24久我山（地域包括支援センター）がバックアップして開催している自主的な地域のサロン活動です。

地域の元気なシニア女性がたくさん参加して、「町内会婦人部」の炊き出しのようにワイワイ楽しく活動しています。

このサロン活動への参加により

- ・ 認知症のある方の参加意欲・活動意欲の向上
- ・ （他地域からの転入者の方の）お友だちづくり、地域の他サークル活動への積極参加
- ・ 一般住民の地域での認知症への正しい理解の場、認知症サポーターの実践の場としての役割が出来てきています。

まちの中で、「認知症」をキーワードにした新しい地域活動のグループとして成長しつつあるのです。

毎年メンバーやボランティアが増え、活動の内容の幅が広がり、自主性も向上してきています。今後は更なる開催箇所数の増加や他地域への拡大なども視野に入れながら、着実な発展を目標に活動をしていきたいと考えています。

活動名	アニマルセラピー&音楽セラピー
要旨	ホームヘルパー講座で知り合った仲間がボランティア団体を立ち上げ、アニマルセラピー活動に着手。家族が、地域が、互いを思いやる事のできる「こころのバリアフリー」を目指し、講習会や施設慰問を行っている。音楽セラピーとのコラボ活動も展開。
応募者	NPOリトルハンド 田中 康嗣
連絡先	〒648-0011 和歌山県橋本市隅田町真土 187-4-1

(概要)

平成14年11月、ホームヘルパー養成講座で知り合ったメンバーが、介護実習で高齢者施設等を訪問した際、施設で過ごすお年寄り達に、より人間らしい潤い、憩い、笑い、喜び等を感じていただく手助けが出来ないかと考え、家族を含め、地域全体で福祉を考え、取り組むことで、お互いがより人間らしく人生をおくれるようにと願い設立したのが前身のボランティア団体『小さな手』です。平成16年6月14日に、NPO法人リトルハンドとして和歌山県から認証されました。

一人の力は小さいけれど、みんなが集まれば何か出来ると言う『小さな手』の歌詞にならい、『出来るときに、出来る人が、出来ることを』をモットーにしています。家族が、地域が、互いを思いやる事の出来る『心のバリアフリー』を目指し、その中の一環として、子供の時からの福祉への取り組みを推進する上での啓発活動としての講習会の開催、動物たちとの触れ合いを通したセラピー(憩い)の体験としての『アニマルセラピー活動』の実践を各地で行っています。

当初は、高等訓練資格取得のラブラドル・レトリバー種の犬(元警察犬)を主にしておりましたが(本年1月、老衰で死去)、現在は小型種のトイ・プードル5頭と柴犬、手乗りのギンバト(手品用の白い鳩)やジュズカケバト(ギンバトと同種)等の鳥類や、小動物のモルモット等を同行してアニマルセラピー活動を展開しています。他の団体でアニマルセラピー活動をしているところはありますが、多種の動物を使用している活動はあまりないと自負しております。これは、犬だけでは施設等の対象者が多く、触れ合い時間が待ち時間に比して少ないことから、取り入れました。

近年、セラピーという言葉がよく使われておりますが、意味は、癒しです。心が癒される、心がリフレッシュされる、心のリハビリ、心のゆとり、心が洗われる等々、人それぞれに思い当たる節があると思います。いろいろな施設で取り入れられている音楽セラピー、音楽療法と効果を二分すると言われているのが、アニマルセラピーです。全面的に取り入れている施設はまだ少ないですが、セラピー・ドッグが活躍している施設も注目されてきています。入所者の表情が明るくなった、心を閉ざしていた子供が話すようになった等、動物との触れ合いが大きな成果をあげています。

私(筆者)が小学校のPTA役員をしていた折りに、アニマルセラピー効果を感じた思い出が二つあります。一つは、学校に寄贈したインコを、休み時間に一人で見ていた女の子。友達を作るのが苦手な子でも、学校に来る楽しみが出来る事で、楽しい学校生活が送れると思ったものです。後の一つは、賛助会員として所属していた盲導犬協会とタイアップして、全学年の児童を対象にした盲導犬授業。子供たちの間で、しばらくは盲導犬に褒美として使う言葉の『グッド、グッド』が流行したのを見ても、目で見て、触れた事での生きた動物との触れ合いが、いかに単純に福祉を子供たちが知るきっかけとなるかを如実にしめしたように、情操教育に動物たちがいかに大きく寄与するかを知ったものです。

今年は、音楽セラピーの専門家と組んでの、『アニマルセラピーと音楽セラピーのコラボ』の取り組みを始めました。いろいろな機会を見つけては、この活動を広めて行きたいと思っております。

活動名	大人のお手軽地域デビュー作戦！！
要旨	地域包括支援センターと合同での認知症予防講演会の開催を経て、継続的に無理なく取り組める活動としてラジオ体操や予防体操を実施。継続のための協力者を広げる活動を展開している。
応募者	川越市地域包括支援センター連雀町 主任介護支援専門員・責任者 丸山 香
連絡先	〒350-0066 埼玉県川越市連雀町 31-2

(概要)

平成18年4月、川越市より委託を受け「川越市地域包括支援センター連雀町」が開設されました。平成19年度より、市内の地域包括支援センターと合同で、認知症予防講演会の開催などに取り組み、認知症に対する関心が高いことを知りました。同時に、継続的に無理なく負担なく続けられる取り組みがあり、かつ、認知症予防に効果的ではないかと考えるようになりました。

[はじまり～地道にこつこつと～]

事務所で職員のラジオ体操を、思い切って道行く人が多い道路に面した駐車場で行いました。初めは気恥ずかしかったのですが、この場所を選んだのは、道行く人に声がかかりやすい、誰もが参加しやすい、何より宣伝になると考えたからです。地域包括支援センターを知ってもらうべく、道行く人のお休み処としてベンチを設置し、花壇を整備、掲示板に目が向けられるように工夫しました。職員が花壇を手入れしていますが、通りがかりの方に手入れ方法を教えていただくなど、地域交流の場としても活躍しています。それがきっかけでその方もラジオ体操に参加されています。

[取り組み]

< ラジオ体操～体操を習慣にする～>

毎朝8時40分から事業所敷地内にて、ラジオ体操を始めたのが平成20年7月のことでした。きっかけは、体力の衰えを感じた職員の『就業開始時に日課で、ラジオ体操をしたい』と発した一言でした。半年近く職員のみで日課が継続できたことが自信になり広く地域に開放したところ、今では参加者も増え、ラジオ体操だけでなく骨骨10秒体操などを取り入れています。参加者のアイデアをもとに、回を重ねるごとに内容が豊富になってきました。『腕が楽に上がるようになったので、物干しが楽になった』『朝、起きるのが楽しみになった』『ラジオ体操をしないと調子が悪い』など、体操の効果について嬉しい声も届きます。まさに、『継続は力なり』です。マスコミで、ラジオ体操は介護予防・転倒予防に最適！と注目された時期でもありました。

< 認知症理解・予防体操フリフリグッパ―講座の実施>

平成21年度認知症フォーラム(NHK主催)に参加した職員の提案で、認知症理解・予防体操「フリフリグッパ―」講座を地域の自治会館などで開催しました。始めたばかりの活動ですが、実践した自治会や参加者などから、次回開催のオファーがすぐにあり、普及啓発は大変好評です。

< 開催場所を増やしたい～協力者を求めて～>

平成21年度川越市の新たな取り組みとして『介護予防を普及するために、転倒骨折予防体操等のプログラムを広く地域の高齢者に周知し、地域においてもその活動を自主的・継続的に実施していけるよう、実践の先導となる人材・ボランティア(介護予防サポーター)の育成とフォローアップ、その活動支援を行うことにより、地域で支えあう介護予防の体制づくりを目指す』講座の開催が始まりました。地域で介護予防に協力いただける方を支援することは今後大切な取り組みになります。継続的に無理なく負担なく続けられるプログラムを展開、構築することが今後の課題です。

活動名	日常支援から災害対策まで - 地域ぐるみの取り組み -
要旨	急速な高齢化による独居・高齢者所帯が増加した地域で、認知症が地域全体の問題となる中、行政と住民が対等な立場で問題解決にあたる「まちづくり会議」が、日常支援から災害対策まできめ細かい支援活動を行っている。
応募者	習志野市谷津西部まちづくり会議 議長 太田 想三
連絡先	〒275-0026 千葉県習志野市谷津 5-27-2

(概要)

1960年代から開発が始まった習志野市谷津地区は、急速に高齢化が進み、その中でも一戸建てが多い当谷津西地区は特に独居や高齢者所帯が年々増加し、それに伴い認知症患者や身体的障害を持つ人が地域全体の問題として顕著になってきている。

それらの方々を念頭に、大災害発生時に地域で助け合う活動を始めたが、その活動を通して日常の見守りやきめ細かい支援活動を続けている。

主な活動には以下のようなものがある。

年間を通して、敬老祝い金配布時や町会費徴収などの機会に各戸をまわり高齢者の状況を調査し、それを取りまとめることで地域の状況を常に把握できるようにしている。

その中で特に見守りや友愛訪問を希望される方に対しては、町会役員や民生委員・ボランティアが手分けして訪問活動を行っている。

認知症に対する正しい知識を習得してもらうために、繰り返し勉強会を開催すると共に、キャラバンメイトの講習を受けた資格者によるサポーター養成講座を開き、100人以上のサポーターを生んだ。

大災害時に災害時要援護者の支援を念頭に置いた防災訓練を実施、地域をあげた支援体制の構築を作り上げつつある。

地域福祉事業所を立ち上げ、町会・商店街・地域福祉ボランティア団体と連携してより一層きめ細かい活動を目指している。

(活動の成果)

主な活動の成果として以下のようなものがあげられる。

勉強会を続けてきた結果、障害者や認知症の人に対する偏見がなくなったと共に、よく見ればこの地域でもサポートを必要とする人が多くいることを認識してもらえるようになった。

このことから、認知症の人や障害者に対してさりげなく見守りを行ってくれる人が増えた。

地域に連帯を通して行事への参加者が増え、同時に地域の問題に関心を持ってもらえるようになった。

認知症の疑いのある人の家族が、早めに病院行くか包括支援センターなどの相談に行くようになり、早期発見できる例が出てきた。

活動名	認知症の方と共に歩み、共に生きる研修会 ～ “吹きだまり” の研修～
要旨	吹きだまり - 「ふ：普通に」「き：気軽に」「だ：だんだん（ありがとう）と言える」「ま：真心を」「り：リンクする」を合言葉に、誰もが安心して暮らせる地域づくりを目指し、職員・家族・ボランティアなど様々な方を対象に研修会を展開している。
応募者	吹きだまり 世話人 近藤 誠
連絡先	〒793-8601 愛媛県西条市明屋敷 164 西条市役所 高齢介護課内

（概要）

愛媛県在宅介護研修センターに関わる6人のメンバーが、平成19年に“吹きだまり”という研修グループを立ち上げ、「認知症の方と、共に歩み、共に生きる研修会」というテーマのもと、平成19年度・20年度と県内3カ所ずつの研修会を行った。

この研修会は、「認知症を正しく理解し、認知症の方の気持ちや行動に少しでも近づき、認知症の方とその家族を地域ぐるみで支え、誰もが安心して楽しく暮らせる地域づくりを目指す」ことを目的とし、認知症のことを知りたいと思う人全てを対象に行っている。

平成19年度は、二日間にわたる研修で、6人の吹きだまりメンバーによるリレー形式の講義を行い、平成20年度は、一日の研修で、グループワーク・フロア討論をメインに行った。平成19年度に実験的に行ったりレーセミナーを含めると、2年間で1,196人(延べ1,568人)の参加を得ることができた。そして、8割を超える方がアンケートに協力していただき、それを分析することにより、みんなが本当に望んでいる研修のあり方、みんなが知りたい・聞きたい・話し合いたいと思っている認知症とは何か少しでも近づけるよう、吹きだまりにしかできない研修を模索している。

認知症のことで心に様々な風が吹いている人たちが、ふと立ち止まり、心を癒し、助け合い、励ましあい、明日への勇気と希望を育む場所、吹きだまりは、そういう場所であり続けたいと願っている。

今後、この活動の延長として、介護に携わる職員も家族も本人もキャラバンメイトや認知症サポーターをはじめとする地域のボランティアの方々も学生も、本当に誰もが気軽に集える小さな吹きだまりを県内各地に作っていきたいと考えている。そのためにも、活動を続けながら核となる吹きだまりのメンバーを広げていきたい。フットワークこそが、ネットワークをつないでいく原動力になると思うのだ。

いろいろな職種の人、立場の人、役割の人、それこそ認知症の方を取り巻く地域ぐるみのネットワークを結んでいきたい。地域の小さな吹きだまりを大切にしながら、それを横につないで、誰もが安心して暮らせる社会になればいいなと、その一助になればいいなと、夢は大きく広がるばかりである。

活動名	地域ぐるみで取り組む、高齢者のSOSに届く見守りネットワーク
要旨	介護・医療・福祉関連の機関が中心となり、高齢者が安心して暮らせる地域を目指し、地域密着の百貨店などと共に高齢者見守りネットワークを発足。見守り活動としてセミナー開催、キーホルダー登録システム導入、レストラン事業を展開している。
応募者	おおた高齢者見守りネットワーク 澤登 久雄
連絡先	〒143-0016 東京都大田区大森北 1-33-9 地域包括支援センター入新井 内

(概要)

1. 「おおた高齢者見守りネットワーク」発足の経緯と活動目的

「おおた高齢者見守りネットワーク」(愛称みま～も)は、平成20年1月、大田区地域包括支援センター(以下、さわやかサポート)入新井・さわやかサポート大森医師会・さわやかサポート徳持を拠点とした地域において、介護福祉関連事業者、医療機関、地域密着の百貨店・レジャー施設などが参加し、大田区、社会福祉協議会、医師会、歯科医師会の後援のもと「大田北高齢者見守りネットワークをつくる会」として発足。その後、六郷地区の2つのさわやかサポートエリアが加わったため、「おおた高齢者見守りネットワーク」へ改称している。

2. 主な取り組み

1) 地域づくりセミナー

毎月第三土曜日、ダイシン百貨店にて、「地域づくりセミナー」を開催。地域づくりセミナーは、地域住民が地域の医療・福祉の専門家や警察・消防から地域全体での見守りの重要性について、また「気づき」の視点について学ぶことを最大の目的としている。参加者は半数以上が高齢者で、感想は「とても良かった」、「良かった」という答えが74.2%を占め、リピーター率も高い。

2) SOSみま～もキーホルダー登録システム

SOSみま～もキーホルダーは、事前に情報を登録し、個人番号の入ったキーホルダーを携帯することで、高齢者が外出先で突然倒れ、救急搬送された場合や認知症の方の徘徊などの際、迅速に対応できる。平成21年8月1日に6箇所のさわやかサポートで始まり、登録者数は450名超。

3) みま～もレストラン

「地域の皆さんが、気軽に楽しく集うことができる場(コミュニティー)をつくりたい」という思いで、協賛事業者である有料老人ホーム「NRE大森弥生ハイツ」を会場に、本年度より「みま～もレストラン」を開店。毎月1回、美容セミナー、調理実習、絵手紙教室などの体験講座と食事会をセットにして提供している。6回の開催を経て、参加者は皆顔見知りになり、自然と会話も弾んでいる。認知症の方も数名参加しているが、スタッフのサポートもあり、他の参加者と共に笑顔で楽しく過ごしている。開店日以外でも施設に立ち寄り、施設の入所者との交流も生まれている。

4) 認知症サポーター養成講座

これまでに、ダイシン百貨店、銀行、小学校などで認知症サポーター養成講座を開催。

5) ソーシャルネットワーキングサービス(SNS)「おおたケアカフェ」

各専門職の情報交換及び交流の場、気楽に相談できる場として開設。登録者数は100名超。

3. 今後の展望

「地域での支え合い」とは、「家族や住民同士の見守り、支え合いに、専門機関が適当な時期に適切な関わることにより実現するもの」と考える。住民と地域の専門機関は介護が必要となる前から、互いの存在を知り、情報を交換し、顔の見える関係を築くことが重要だと考え活動している。

活動名	認知症の理解から住民参加のまちづくりをめざす羽後町の取組み
要旨	住民中心の認知症予防活動グループ「若竹元気くらぶ」、認知症サポーター養成講座、地域住民へのキャラバン・メイト養成研修などを地域包括支援センターがサポート。認知症の理解から「住民参加のまちづくり」へと歩みをすすめている。
応募者	羽後町地域包括支援センター 伊藤 和恵
連絡先	〒012-1103 秋田県雄勝郡羽後町林崎字五林坂 21-1

(概要)

羽後町民に認知症の理解をしてもらう、認知症予防活動に興味を持って取り組んでもらう、そして認知症でもだいじょうぶな町づくりに住民自ら企画提案できる仕組みづくりを目指し、羽後町はどんな活動をすすめてきたのかについて報告します。

主な活動は次の3点です。

1. 認知症予防活動グループ 「若竹元気くらぶ」
 ファイブ・コグ検査から誕生した認知症予防活動グループ
 「若竹元気くらぶ」がもたらした効果
2. 認知症サポーター養成講座の開催
 平成20年3月という時期によくキャラバン・メイトになった
 羽後町地域包括支援センター職員の取り組み。
3. 地域住民へのキャラバン・メイト養成研修
 1年間認知症サポーター養成講座を開催してきて実人数の
 伸び悩みが、次のステージへのきっかけに。

「認知症を知り認知症になっても安心して暮らせる町づくり」をこの羽後町でもしっかりと取り組もう！と本格的に動き出せたのは、平成20年3月に秋田市で行われた「認知症サポーターキャラバン・メイト研修」に参加し、認知症介護研究・研修仙台センター長である加藤伸司先生の講義を受講できたことと、同時期に横浜市の2つの地区の取り組みを視察できたことにあると思います。

地域包括支援センターの職員だけの活動では限界があるが、地域の住民の参画と関係機関の連携があれば、いままで見えてなかった社会資源が目の前に現れてくれる、そんな期待も日々の活動のなかでふくらんできております。

活動名	地域社会の認知症患者のセーフティネット維持の取り組み
要旨	超高齢化社会を迎え、認知症患者・家族のセーフティネット崩壊を危惧。このセーフティネットの維持を目指すべく、精神科医としての加療、介護現場との連携、身体科病院との連携、行政との連携や認知症の啓発活動などに取り組んでいる。
応募者	大野 篤志
連絡先	〒321-0605 栃木県那須烏山市滝田 1868 烏山台病院内

(概要)

我が国は世界のどの国もがその歴史上かつて経験したことがない超高齢化社会を迎える。日本国全体の2009年度の高齢化率は23.1%であり、2014年度には推定26.9%に達すると推定されている。そして私が精神科医として2006年4月から勤務している特定医療法人薫会烏山台病院 / 栃木県指定認知症疾患医療センター - が立地する栃木県東部の那須烏山市の高齢化率は、2006年度は25.7%であったが、2009年度現在27.0%迄1.3%上昇しており、2014年度には31.2%に達すると推定されている。そして、その高齢化率の上昇や日本の経済状況の悪化に伴い、介護破綻に至るような認知症患者、患者家族が、精神科医としての診察の場面で急激に増えている印象があり、認知症患者、認知症家族のセーフティネットは崩壊しかねないと強く危惧している。高齢化率だけで考えるならば栃木県那須烏山市の高齢化率は日本全国の5年先を進んでおり、現在、私が抱えている認知症患者、患者家族のセーフティネットが崩壊するのではないかと強い危機感を感じ、日本の5年後の危機感を先取りしているのではないかと考えている。

であるならば、現在、私が強く抱えている、そして、精神科医として認知症患者、患者家族の医療に携わる者として私が実践してきたこの栃木県那須烏山市での「1. 認知症患者、患者家族への医療の提供」、「2. 地域社会との連携推進の取り組み」、「3. 認知症の啓発活動」は日本全国の高齢化率の高い地域での、そして、超高齢化社会がさらに加速的に進む日本の1モデルになるのではないかと考えている。

認知症患者、患者家族のセーフティネットは1医療機関の1精神科医だけで担えるものではない。地域社会との連携協力が必要不可欠である。私がこの3年半烏山台病院のスタッフと共に取り組んできた精神科医としてのBPSD加療、介護現場との連携、身体科病院との連携、行政との連携、そして認知症の啓発活動について発表し、それが我が国の認知症患者、患者家族の置かれた厳しい状況が改善される1助になれば幸いであると考えている。本当に厳しいのはこれからである。まだまだ、「認知症でもだいじょうぶ」な地域には、ほど遠い少子高齢化の著しい那須烏山市であがっている毎日であるが、いずれこのあがきには「夜明け」が来ると信じている。今発表は、今迄の私の3年半の活動の振り返りであり、そして、認知症患者、患者家族のセーフティネットの維持の為に今後のさらなる活動の新たな出発点でもあると考えている。重症のBPSDの加療には大きな負担が掛かる。それを共に行っている烏山台病院の職員には特に深く感謝する。「私」という言葉の中には、地域で共に認知症患者、患者家族のセーフティネットの維持の為に活動している皆が含まれる。

活動名	地域人材育成（笑いと認知症の理解を地域に広めよう）
要旨	施設開設時から介護者や地域の人材育成に注力し、認知症の理解と共に、認知症の人の力を目に見える形で発信するなど、認知症に視点をあてたまちづくりや「人づくり」に尽力。地域と協力し認知症の理解や自然体で支援する体制づくりを行っている。
応募者	有限会社 エーデルワイス 施設長 青山 由美子
連絡先	〒090-0826 北海道北見市末広 350 番地 59

（概要）

北見市は平成18年に合併し北海道内最大の面積を有し、高齢化率は24.5%と平均よりも高い比率です。この地域の介護保険施設として認知症の理解と共に認知症の人と地域との交流、認知症の人の力を目に見える形で発信しようと、開設以来、法人全体として取り組んでいます。

日本は古来より儒教の精神、五常（仁、義、礼、智、信）が強く根付いており道徳的な精神でありました。後期高齢者の多くの人達がその見識ある精神を持ち合わせていた為に荒廃されたとはいえず、まだしのいできたのではないかと思います。今、全てにおいて自由となった世の中で高齢者や障害者の尊厳は必ずしも確立されていません。今の時代だからこそ、認知症という病気を通して認知症の人に視点をあてた、まちづくりを行うことが間接的な“人づくり”になると思います。

エーデルワイスでは、開設時より理念を基礎に介護者や地域の人材育成に主眼を置き、約3年前からは儒教を根底に、人に親切に親を大事に隣人とは仲良く、今の福祉の課題から地域の課題まで語ることのできる外部講師を招き、人として介護者として、あるべき方向を導いていただいております。地域の人材育成からは、毎年の継続により少しずつ理解を得られるようになり徘徊者と思われる方の発見には地域の民生委員から直接連絡をいただき、確認後その方の家までお送りさせていただくなど職員と地域との関係性も一歩、一歩良い方向へと築かせていただく状況へと発展し職員共々嬉しく思います。

事業所は率先して、認知症を誰もがなりうる病気だと理解し、地域で尊厳をもった生き方ができるように今、行っていることは自分達の為に行うことである事を職員全体が地域へ向けて発信を行っています。また、10月19日（月）19時～20時勤務されております方々の参加しやすい時間に、北見市介護福祉課主催キャラバンメイトフォローアップ研修等、10月28日網走支庁主催キャラバンメイトの養成研修等、行政と共に発信ができますことに感謝いたします。

エーデルワイスの認知症を通した活動趣旨は次の7点です。毎年、この趣旨を根底に活動させていただいておりますが年々減ることなく増す状況となってきております。

認知症の人からの発信 - グループホーム入居者様が、地域ご婦人達に、うどんづくりの技を伝授。

地域住民と各事業所と共に行う認知症の理解 - 留辺蘂地区社会福祉協議会・地域包括支援センター・町の介護事業所・老人クラブ・民生委員と行う認知症劇

小学生へ認知症を通して思いやりの実践 - 春休みの一日をホームで高齢者とカレーライスづくりを行い、昔話を聞かせていただく

中学生に行うサポーター養成と現場体験 - 講座後のグループホーム触れあい体験

高校生へ認知症の理解 - 福祉科高校生に一步、先行く実習前の転ばぬ杖の認知症の理解

笑いの体操を地域へ - エーデルワイス恒例の笑いの体操が花園地区新年会と笑いの体操・地域で笑いの先生が誕生・利用者が交流会で行う笑いの体操

地域で語り、あるべき方向を学び合う地域社会の勉強会

活動名	地域福祉の根起こしを地域の人たちとともにはじめよう
要旨	介護者同士や支援者の交流会活動の実施、認知症啓発活動、介護予防教室の実践を3本柱に、地域のボランティア団体と共に地域福祉の根起こしに取り組んでいる。
応募者	社会福祉法人正和福祉会そよかぜの杜 在宅介護支援センターと 認知症について語る会「さつき会」 大橋 計以子
連絡先	〒849-2304 佐賀県武雄市山内町大野 7045

(概要)

「地域貢献への取り組み」は「地域福祉の根起こしを 地域の人たちとともに はじめよう」というテーマで平成15年から現在まで、在宅介護支援センターが、「さつき会」というボランティア団体と共に取り組んできた事業です。

当法人は平成11年4月に特別養護老人ホーム「そよかぜの杜」を開設、社会福祉法人としての出発は芳華保育園を設置した昭和23年にさかのぼります。平成17年には「児童福祉」「高齢者福祉」に加え、「障害者福祉」にかかる複合型福祉施設「Warmly ひだまり山荘」を開設しました。私どものフィールドである旧山内町は現在、総人口1万人弱、高齢化率が約25.5%、高齢化と過疎化が進み、平成15年ごろは今ほど「認知症」について一般の知識や理解は進化していませんでした。農村地域でもあり、旧態依然とした家族力への期待も大きく、介護家族を孤立させがちでした。

平成15年から現在まで取り組んできた事業は、認知症家族の介護をされている方やかつて介護されていた方、支援者の交流会「家族の会 さつき会」の実施、他の「家族会」との交流の実施、認知症の啓発を目的とした講演会などの実施、先進的取り組みをされている地域や施設への視察研修、在宅介護支援センターに委託された「介護予防教室」を在介と「さつき会」が協働して行う、などです。これらの活動で期待される効果としては認知症ばかりでなく、誰もが生活自立が困難な状況になる可能性があります。そのときに尊厳を保つ適切な支援を受けられる地域であったら安心して暮らし続けられるということです。

在宅介護支援センターを事務局として、平成15年5月に「さつき会」という家族会が発足しました。この会の目的は認知症の方を抱えるご家族をはじめとする介護者の精神的支えあいと地域支援の土壌を創ることです。発足当時から現在まで継続している「さつき会」の活動の根本的内容は、毎月1回例会として介護家族や支援者の交流会を実施していることです。また「さつき会通信」も発行しています。

地域貢献活動の3本柱は、法人が「さつき会」活動の支援、認知症啓発活動、介護予防教室である「脳若がり教室」は在宅介護支援センターと「さつき会」が協力して行う、です。学習を重ねる中で「さつき会」は、会の方向性を見出し、平成18年には地域活動を行う団体に対する県の支援事業に申請し、3年間の期限とする佐賀県焔博記念地域活性化事業に採択されました。それにより、「さつき会」講演会などの認知症啓発活動を自主的に実施しています。

また、在宅介護支援センターに委託された「介護予防教室」を「脳若がり教室」と名づけ、60歳以上のほぼ自立高齢者を対象に毎月1回実施し、「さつき会」会員のボランティアにより支えられています。内容は読み書き計算や塗り絵、運動などです。また、「ことばあそび」面白俳句作りも実施し、面白俳句をさつき会の講演会場に展示しました。高齢になっても可能性を秘め、新しい挑戦によって生きる世界が広がっていくことを、参加者の感想などから感じています。

活動名	その人らしさを中心に置くケア ~もっと自分らしく楽に生きていきたい~
要旨	認知症の人、その家族、認知症ケアに関わるすべての人が認知症を正しく理解し、住み慣れた地域でその人らしく生活がで出来るよう支援することを目的とし、地域の人と共に勉強会を行ったり、劇団を発足して啓発活動の拡大に努めている。
応募者	NPO 法人 認知症を正しく知る会「もっと らくっと」 山本 一雄
連絡先	〒409-0112 山梨県上野原市上野原 3584

(概要)

認知症の人が急速に増えています。要介護認定者のうち2人に1人は認知症といわれています。明日はわが身。極めて身近な病気になってきました。

以前、私たちは認知症を良く理解していなかったために、認知症の人にみられる徘徊や攻撃的行動、暴言、ひどい物忘れなどの症状に対して、一方的な対応をしてきました。

認知症を正しく理解することによって認知症ケアの方向性と質の向上ができると考えました。勉強していくうちに、ケアに関わる私たちの人間性もケアの質に反映されていくことが解ってきました。認知症になっても「個」という人格があります。もっと自分らしく楽しく生きていきたい！人間なら誰でもそう思うはずです。認知症になっても心は生きています。私たちは、その心を大切にしていきたいと思います。私たちも「心」のケアを目指していきたいと思います。「認知症の人がもっと自分らしく楽しく生きる」、しかも住み慣れた地域で！！

平成20年7月に任意団体として、認知症を正しく知る会「もっと らくっと」を設立し、地域の人達と共に、認知症や認知症の人のケアを正しく理解するために勉強会を開いています。

<活動内容>

- 1) 認知症ケア勉強会
- 2) 機関紙「らくっと通信」の発行(隔月)
- 3) 情報提供・相談
- 4) 爆笑劇団「ああ 上野原」の発足

平成21年11月の旗上げ公演に向けて、団員一同、只今お稽古中です。

活動名	おでかけSUN倶楽部
要旨	「外出困難な方を一人でも多く外へ連れ出そう！！」を合言葉に、移動困難者・障がい者の外出支援を目的として、有償移送サービスを開始。どこにでも行ける利点を生かし、社会生活を楽しめるようなサポートをしている。
応募者	NPO 法人北海道外出支援センター 石井 雅英
連絡先	〒065-0021 北海道札幌市東区北21条東10丁目2-15-201

(概要)

【設立主旨】

平成17年2月に『外出困難な方を一人でも多く外へ連れ出そう！！』を合言葉に、ガイドヘルパー、ボランティア経験者8名でボランティアグループを結成。

その活動を継続させ、この事業を通し、社会に貢献することを主旨にNPO法人を設立。

【NPO法人設立までの経緯】

メンバーが個々に、北大病院内ボランティア・車椅子旅行者ガイドボランティア・衆議院選挙投票移送ボランティア・東札幌病院内ボランティア・山の手リハビリセンター入居者買い物同行等、地域ボランティアの活動を通し、移動制約者・障がいを持つ方々の外出支援をすることを目的に、ボランティア有償移送サービス及び、生活支援サービスのNPO法人設立を計画。

平成17年 - 7月NPO法人申請、同10月法人格取得。同12月事務所開設。

平成18年 - 利用会員へのボランティア有償移送サービス・生活支援サービスを開始。

札幌市・石狩市より有償移送許可の申請・受理(会員数：札幌市36人、石狩市8人で開始)

平成19年 - 平成18年度の介護保険法改正や会員増加の為、車両を増車

これまで、NPOによる有償福祉輸送団体がたくさん登録されていますが、登録後に事業継続が困難になり、いわゆる支援費(介護保険・自立支援)による移送へと変化するのが実情です。「誰もが、行きたい時に、行きたい所へ、普通に外出できるようにサポート」を守るためにも、ボランティアを募り、この地域で暮らす、移動困難者との大切な繋がりが鍵であると思っています。

平成21年の主な事業として、「おでかけSUN日記」DVD版を製作しております。障がいがあっても、フルタイムで働く21歳の女性の一年間の生活、野外での楽しみを、今までありがちな障がいの困難を社会に知ってもらうことを目的とするのではなく、障がいがありながらも、楽しく社会生活を楽しめる姿を理解してもらいたいという主旨で制作を開始しています。勿論、様々なサポートが必要になるわけですが、そのサポートの在り方も含めて検証できればと思っています。

支援費によらない外出支援の利点は、どこにでも行くことができるという点にあります。美術館や、イベントの参加、小旅行や、一泊旅行、そのスタイルを有償福祉移送で守り続けることは、事業としては大変であると思いますが、移動困難者にとって介助サポートがある有償移送はどれほど利用価値があるかを考えれば、今後ともこのシステムを守り続けなければならないと思っています。課題になるのは、今後増えてくるであろう一人暮らしの家をどのように見護るかが、私達の活動の中から解決しなければいけない問題点であろうと思います。公的サービス、担当窓口、民間のサービス、どの部分が抱えている問題を解決することができるか、繋ぐ役割が非常に大切になってくると思います。平成21年度の事業は、この問題に取り組むために「いきいきホットライン構築事業」にも取り組んでいます。

活動名	「介護事業所の有志の職員が立ち上げた『かまくら認知症ケア研究会』の取組み」
要旨	介護事業所の有志職員が研究会を立ち上げ、本人本位のケアの実現を目指し、センター方式勉強会、事例検討会、フォーラム開催等を実施。事務局や予算をもたない中、行政の協力を得て地域のネットワークの輪を広げている。
応募者	かまくら認知症ケア研究会 稲田 秀樹
連絡先	〒248-0012 神奈川県鎌倉市御成町2-5 社会福祉法人鎌倉静養館ケセターりんどう内

(概要)

2007年秋、鎌倉市内の老舗お好み焼き屋に9人のケア関係者(地域包括支援センター、グループホーム、通所介護、訪問介護、ケアマネジャー等)が集まり、「認知症ケア関係者の集い」と称した飲み会が行われました。会の冒頭、幹事からはこんな挨拶が...。「認知症ケアにはチームワークが何より大切といわれています。お集まりの皆さんもお好み焼きを作るという共同作業を通じて、ぜひ交流を深めてまいりましょう...」。その飲み会が後の「かまくら認知症ケア研究会」(以下研究会)につながる貴重な一歩になりました。飲み会の翌々日には、鎌倉市高齢者いきいき課(旧高齢者福祉課)を交えて協議し、研究会立ち上げの方向で意見が一致しました。鎌倉市の高齢化率は25.9%(現在26.6%)であり、認知症対策は“待ったなし”といった状況にありました。

研究会の活動目的は、『ケア関係者の資質の向上を図り、認知症ケアを通じて地域のネットワーク作りを進めることにより、本人本位のケアを実現し認知症の人と家族の生活を支援すること』(研究会規約より)にあります。2008年度には、本人本位のケアを実践する足がかりの活動として、『センター方式勉強会』(全4回、延211名参加)を実施。また市主催の研修会「認知症になっても地域でその人らしく暮らし続けるために」に企画協力。「認知症の基礎的理解」(42名参加)を深める研修会を実施。「地域ケアのネットワークの在り方」(59名参加)では、地元の家族会と研究会、介護事業者が連携して困難ケース改善活動を行った報告会を開催。また、困難な状況にある介護事業者を、参加者みんなが知恵を出し合い、支えあえる仕組みづくりを目指した「参加者提案型の事例検討会」(66名参加)も実施しました。2009年度には「事例で学ぶ認知症の人への対応」(101名参加)の研修会に於いて本人本位のケアの実践例を紹介し、また「ケアネットワークを考えよう」というテーマでフリートークの集いも実施しています。

参加者の多くは仕事を終えてから駆けつけるので、疲れを溜めない工夫も必要です。勉強会の会場には常にコーヒーやちょっとしたお菓子などを置いた休憩処を設置しています。お菓子などの代金は参加者の気持ち程度のカンパによってまかなわれています。

2009年7月11日には、鎌倉市と共催で「認知症地域支援フォーラム...認知症になっても地域でその人らしく暮らすために」を開催。研究会はフォーラムの概要案の作成、企画構成や関係者間の調整、会場設営から当日の進行を担いました。行政、市民、福祉関係者、介護事業者がともに考え、ともに作り上げたフォーラムとなりました。また、同年9月、幹事を集めた会合に於いて活動内容の検討が行われ、今後は「地域のネットワーク作り」により重点を置いた活動を実践していくこととなりました。既存のサービスで支え切れないニーズに対応すべく、新たな取り組みを開始しています。

私たちの研究会には事務局も予算もありません。研修会案内の郵送などは行政の協力をいただいています。今後もさまざまな機関、市民、地域の活動と連携してネットワークの輪を広げていきたいと考えています。

活動名	かまくりんどうの会 20年の軌跡
要旨	地域密着の家族会として行政の支援をうけながら、介護家族の横のつながりによる情報の交換、福祉の向上を目的とし、電話相談、サポート会、お楽しみ会、喫茶サービスを実施。介護中の会員と、介護経験のある会員が協力しあい活動を広げている。
応募者	かまくりんどうの会 木場 貞雄
連絡先	〒248-0011 神奈川県鎌倉市扇が谷 1-10-9

(概要)

認知症の人と家族の会は1万人の会員を擁する全国組織ですがその活動は全国都道府県に支部を設けて活動の輪を広げようとするもので、会報等の機関紙を通じた情報が豊富で、支部の活動に参加すれば更に大きな成果が得られますが、一方で、居住区の市町村で自発的に立ち上がった家族会はその狭い地域でしょっちゅう集まりやすいという大きなメリットがあります。かまくりんどうの会はそのような地域密着型の家族会です。

当会は平成元年に鎌倉保健所、鎌倉市社会福祉協議会共催、鎌倉市後援で行われた「痴呆老人を抱える家族のつどい」に参加した有志により発足しました。鎌倉保健所改め神奈川県鎌倉保健福祉事務所は、認知症問題を抱えた家族の相談に専門スタッフを置いていただいて我々の会とは緊密に連携をとってくれています。鎌倉市社会福祉協議会は、福祉センターにおける会合場所の提供をはじめ活動支援、活動資金のサポート他、多々特典を与えてくれています。鎌倉市は市長様を始め福祉関係のスタッフに新年会、総会、他主要な行事においていただく他、介護保険を含む情報提供をいただき、数々のイベントの相談に乗っていただいております。

このように行政他主要関係機関から絶大なるご支援をいただいている事が我々の会の成功の1つの秘訣と思います。

日頃の活動は、第一火曜日のサポート会、第一、第三土曜日の電話相談、第三木曜日のお楽しみ会(みんなでデイ)、第二金曜日の運営委員会、更には、毎週金曜日に特別養護老人ホーム稲村ガ崎きしろにおける喫茶サービスを行い、特に男性会員が大もてで入所者と懇意になっています。地元施設との交流にも力を入れています。1月は新年会、6月は別会場での家族全体お楽しみ会、10月は新聞社の支援により日帰りバス旅行を実施しており通常のお楽しみ会はお休みです。

これからは介護の事情でサポート会になかなか参加できない方を対象に市内の各地区に出向いて行って相談会を実施することにしており、今年は腰越地区で催すことにしています。

平成20年度に創立20周年を迎えましたが、幸運にも社会貢献支援財団から表彰と合わせて副賞金一封をいただきましたので新年会で祝賀昼食会を行い、永年貢献者を表彰し表彰状を送りました。20周年記念事業として更に今年春に20周年記念介護体験文集を編纂し、10月には小川宏氏にお願いして20周年記念講演を行う段取りになっています。

特筆すべき内容としては、私共の長年の夢である“介護者に急用ができたときの緊急時に認知症の人を預かってもらえる施設”を、3672名の署名を添えて鎌倉市に懇願したところ、市議会で承認され予算がついたことです。対外活動は不得手でしたがこのときばかりは皆で喜び合いました。かまくりんどうの会の会員は現在160人を超えています。鎌倉市における介護保険認定者が7000人強、そのうちの半分3500人が認知症だと想定すると会員数はまだ少ないと言えますが、我々は更に会の知名度を高めて認知症で困っている人を助けていきたいと念じております。

活動名	認知症高齢者を地域で支えるために
要旨	認知症になっても尊厳をもって住み慣れた地域で安心して暮らせる地域づくりを目指し、関係機関・団体・行政によるネットワーク会議を立ち上げ、連携をとりながら地域への普及活動、早期発見と適正治療の体制づくりをすすめている。
応募者	島根県益田保健所 大場 静枝
連絡先	〒698-0007 島根県益田市昭和町 13-1

(概要)

人口の高齢化に伴い、益田圏域における認知症高齢者は約1,380人と推計されている(平成10年高齢者実態調査における「認知症老人の日常自立度判定基準」より)。認知症は本人が重症化してから相談窓口につながる傾向があり、圏域の精神保健担当者会議において地域の中で「認知症」について理解を深めることと、早期受診・早期対応できる支援体制の必要性が指摘された。そこで、平成13年に「益田圏域認知症高齢者に関するネットワーク会議」を設置し、関係機関が連携をとり、認知症高齢者を地域で支える取組を進めている。これまでネットワーク会議が果たしてきた役割と今後の課題について考える。

1. 地域の概要

益田圏域は島根県の西部に位置し、広島県、山口県と県境を接しており、総面積は1,376.5km²(県全体の20.5%)で、その88%を森林が占める典型的な中山間地域である。平成18年の年齢階級別推計人口は、68,280人(男性:31,811人 女性:36,469人)で、65歳以上人口は31.4%となっており、県や全国に比べ高くなっている。

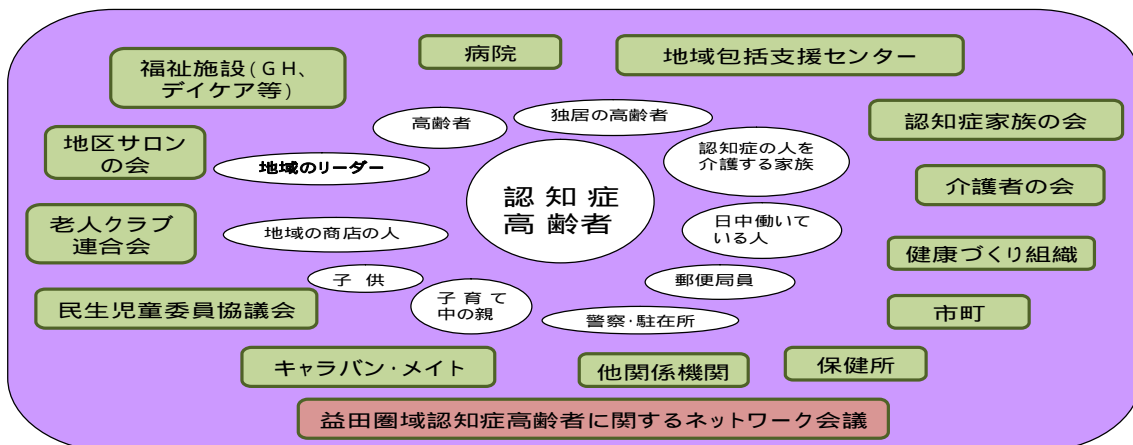
2. まとめ

認知症高齢者に関わる関係機関・団体・行政のネットワークが構築され、地域への普及啓発、早期発見と適正治療の体制づくり、資質向上等がはかられた。

地域で認知症になっても安心して暮らせるまちづくりが重要であるとの認識が深まり、地区振興センターや公民館等を中心とした認知症を理解し支援する取組がはじまっている。

今後もネットワーク会議の構成員とキャラバン・メイト、住民が一体となって、認知症になっても尊厳をもって住み慣れた地域で安心して生活ができるような地域づくりを目指していきたい。

安心して生活できる地域づくり



活動名	「判断能力が低下しても安心して暮らせる町に」
要旨	判断能力が不十分な方の権利擁護を目的に、ともに地域で生きる高齢者の仲間という意味をもつ「シニアメイトサービス」を設立。成年後見制度の利用支援、制度の普及・啓発活動を中心に行う。ミニデイ、学習会などの活動が地域に浸透してきている。
応募者	特定非営利活動法人シニアメイトサービス 藤崎 由美子
連絡先	〒208-0013 東京都武蔵村山市大南4丁目24番地10

(概要)

2004年2月、ともに地域で生きる高齢者等の仲間という意味を持つ「シニアメイトサービス」を設立しました。設立当初より、成年後見制度の必要を感じ、判断能力が不十分な方の権利擁護を目的に、成年後見制度の利用支援、制度の普及・啓発活動を中心として行っています。また、今年度は「地域の方を地域で支える」ために、「市民後見人」の養成を行っています。また、2年前から介護保険外のミニデイサービスを週1回開催しています。

学習会や説明会も開催しています

御相談も応じています

ご病気やご高齢で、日々の暮らしや将来が不安な方、ご本人、ご家族などからのご相談に応じます。

- ・公的な各種福祉サービスのご説明
- ・成年後見制度をわかりやすくご説明
- ・裁判所への申立て手続きのご説明

こんな時にどうぞ

- ・ご病気・ご高齢のご家族がいらっしゃり、介護にお疲れになっている
- ・ご高齢で一人暮らしの方が困っている
- ・介護保険では対応してもらえない、困ったこと
- ・困っていることはあるけど、高い費用は出せない
- ・成年後見制度を利用すると言われてたけど、どうしたらいいの？

<事業一覧>

介護保険	介護保険のご相談・申請するときの同行(車でお迎えに伺います) 介護保険では受けられない、福祉サービスのご説明 受けられる福祉サービス情報の提供、申請のお手伝い
成年後見制度 & 市民後見人の養成	制度全般のご説明 制度を利用するにあたっての必要書類作成・申請などのお手伝い ご家族などが後見人になった時の支援、専門家のご紹介など
学習会	ご家族のためやご自身のために、また地域で成年後見制度に関する活動をしたいと考えている方を対象に、学習会を開催しています。 5名以上集まった場合は、出前講師を行います。
発行書籍	「成年後見申し立ての手引書」 ¥700 「成年後見実務手引き書」 ¥700

活動名	なじみある地域で安心して過ごせる「もう一つの我が家づくり」
要旨	「いつまでも住み慣れた場所で自立して暮らしたい」の思いを受け、デイサービス、介護保険外の賃貸住宅、地域包括支援センター、生きがい活動支援通所事業を展開、足湯などの一般開放、自治会の集会場の提供など施設を地域の共有財産として開放。
応募者	社会福祉法人 桜井の里福祉会 生きがい広場地蔵堂 センター長 小杉 裕子
連絡先	〒959-0323 新潟県燕市分水栄町1番3号

(概要)

平成18年10月、新潟県燕市分水地区中心部に生きがい広場地蔵堂はオープンした。元々この場所は、長きに渡り地域の医療を支えてこられた診療所の跡地であり「広く地域の福祉に役立てて欲しい。」との地権者や分水町の思いと、地域の高齢者の皆様の「いつまでも住み慣れた場所で自立して暮らしたい。」という思いを受け、介護保険事業だけでなく地域の皆様が「年をとっても障がいがあっても、生きがいを持ち、生涯現役をいつまでも続けていただくこと」を最大の目的とし、当法人が、この地蔵堂の地域に事業を展開することとなった。

(1) 生きがい広場地蔵堂・運営委員会等

開設準備段階より住民説明会を開催した。また地域住民・各団体の代表から構成される運営委員会を組織し、地域の方々からのご意見・ご要望を頂きながら、生きがい広場地蔵堂の事業がより地域に密着したものとなるよう定例会を開催している。

(2) 「地域の共有財産」としての施設の機能(地域への開放や緊急避難場所として)

分水地区の中心部である特性を生かし、近隣住民や市日に来られた方々が気軽に立ち寄られる「足湯」や公衆浴場法に基づいた「お風呂の一般開放(夜間)」、自治会やサークル活動等の会合に「茶の間」を開放している。また、災害時における「緊急避難場所」としての施設の開放を町内と相談している。さらに平成20年度より、地域と合同で避難訓練も実施している。

(3) 街全体がデイサービス(地域ボランティアの参加と施設の外に目を向けた取り組み)

デイサービスの特色として、利用者自身で作る一日の活動メニューの選択制を導入しており、およそ50種類からなるメニューのうち、陶芸・手芸・麻雀・カラオケ・川柳・そば打ち等にボランティアを講師に迎え活動している。さらに街全体をデイサービスとして考え、街へ出て行く活動も重視している。

(4) 生活を上げる場としての「複合住宅」

複合住宅には、高齢者や障がい者が入居されている。私達は、複合住宅がそういった方々にとって、当たり前になる生活できる場所でありたいと考えている。また、たとえ年をとっても・障がいがあったとしても、安心して暮らせる「地域の共同生活の拠点」として、自治会・近隣住民・商店とのネットワークの構築に今後も努力していきたい。

活動名	話・輪・笑って開催「しおかぜ会」
要旨	認知症サポーター養成講座の推進による、認知症の理解と啓発を目的に発足し、区内初のキャラバン・メイトによる認知症理解のためのボランティア活動を展開。紙芝居や寸劇を交えた出前講座を実施し、助け合える町づくりの推進を目指している。
応募者	「しおかぜ会」 川副栄子・中川京子・山田あゆみ
連絡先	〒 230-0048 横浜市鶴見区本町通 4-171-23 横浜市潮田地域ケアプラザ

(概要)

しおかぜ会の活動拠点、横浜市鶴見区潮田地区は、京浜工業地帯であり、港湾はコンビナート地帯である。昔からの労働者の町であったが、公害問題、バブル崩壊後は労働人口が減少。しかし、潮田住民が培ってきた、外から入ってくる人を受けとめる気質は、新たな住民や海外移住者を受け入れる大きな基盤となっている。下町の良さである互助精神が今も残るが、その一方認知症を含め他の病気の理解が不十分で、早期発見、早期治療を遅らせていることが多くある。

(1) しおかぜ会の目的とメンバー

横浜市潮田地域ケアプラザを拠点に「しおかぜ会」は活動、認知症サポーター養成講座の推進による、認知症の理解と啓発を目的に発足した。キャラバン・メイトによる鶴見区内で初めての認知症理解のためのボランティア活動である。地域に根ざした活動「ゆったり、楽しく」をモットーに少人数からでも出前講座を実施している。メンバーは、キャラバン・メイト、サポーターのほか潮田地域ケアプラザ地域包括支援センターの職員・地域活動交流コーディネーター、鶴見区社会福祉協議会（潮田地区担当）、鶴見区高齢障害支援課 高齢者支援担当（潮田地区担当）及び福祉保健課、事業企画係・健康づくり係（潮田地区担当）で、毎月第3火曜日に連絡会を開催している。

(2) 平成20年度の活動と成果

活動 鶴見区全体の集まりでの認知症サポーター養成講座実施。潮田地区の潮田地域ケアプラザの秋祭り行事に参加。認知症の話と劇団「つるみ座」（認知症サポーターで結成）による寸劇を実施。多目的に利用するため、紙芝居作成。

成果 少人数のお茶会講座から、100名前後の出前講座を潮田地区以外では実施していたが、地元の潮田地区では開催にはいたらなかった。

(3) 平成21年度（前期）の活動と成果

活動 潮田地区全体での地域に根ざす認知症啓発に重点をおき実施すること。「民生委員、老人クラブ会員、社会福祉協議会（以下地区社協）の会員」の全員が認知症サポーターとなること。紙芝居の続編作成。

成果 民生委員や地区社協会員のサポーターは着々と増加。また、「つるみ座」の寸劇は、認知症サポーター養成講座の出席者に合わせ内容をかえている。しおかぜ会の紙芝居は、市民セクターよこはま「町かどケア」のホームページに提供し、誰でも使用できるよう協力している。少しずつではあるが、潮田地区に入る糸口を見つけ始めている。

今後は、民生委員、地区社協会員の全員がサポーターになり、老人クラブ会員のサポーター養成講座を検討している。高齢者住宅の居住者との対話から学ぶことが多く、地域に根ざした認知症サポーター養成講座が実施できるようにしていきたい。また、潮田地域全体に、認知症に対する理解が深まることにより、昔からの共に助けあう“おたがいさま”の町が知識をつけることにより、一層助けあえる町になることを目標に活動している日々である。

活動名	「認知症の家族のつどい」～どンドン広がる輪～
要旨	「ひとりで悩まないで、一緒に考えてみませんか？」を合言葉に、認知症の家族会の活動を展開。市内3箇所毎月「家族の集い」を開催する他、施設見学や介護教室、24時間電話相談等を実施。要望に応じ「何でも何時でも何処でも」の支援も行う。
応募者	下関市認知症を支える会「キャッチボールの会」 代表 篠原 博之
連絡先	〒751-0841 山口県下関市垢田町五丁目 18-1

(概要)

「ひとりで悩まないで、一緒に考えてみませんか？」を合言葉にして、「認知症の家族会」を始めて5年目に入りました。今は下関市内の3箇所毎月「家族の集い」の開催を中心にした活動をしています。会員は25名ですが会員以外の参加も多く、「集い」だけの活動ではなく、日常的な支援体制のもと、要望があれば「何でも」「何時でも」「何処でも」を心がけています。「集い」では介護家族どうしの近況報告や相談、情報提供など行い、10名～15名の参加者があります。

最近の特長は介護専門職(介護士、看護師、ケアマネージャー等)が参加し、介護家族の「苦悩」「思い」を聴いて役立てたいと言う人や、専門の立場からのアドバイスなど協力を頂いています。

(活動の内容)

家族の集い - 市内3地区で開催しており、最寄りの会場に参加して頂いています。暗い雰囲気にならないよう、「参加してよかった」と思える、満足できる時間を目指しています。介護保険制度や施設・病院などの情報の提供するために、最新の資料や情報を用意しています。一番大事にしていることは、ご家族が「思い切り語って」いただくこと、「家族の全員が語る」こと、「しっかり聴く」ことです。

介護施設の見学 - バスを借りて、一日4～5箇所の希望が多い施設を見学します。緊急時にはその家族と一緒に施設訪問して、方向性を出します。

介護教室 - 認知症の勉強だけでなく、移乗介助やオムツ交換など。医師など各機関の専門家や行政など好意的に支援を頂くほか、折々に地域市民向け講演会を開催。

24時間電話相談 - 電話相談の延長上で希望者には面接による相談も行います。(約半数の方は傾聴することで解決するが、繰り返して来られる人もあり、丁寧に真剣に対応しています)夜中の電話には緊急時の依頼もあります。

「認知症サポーター養成講座」への取り組み

「介護職員の為の認知症出前講座」の開催

(活動の成果と今後の展望)

行政、医療、福祉など各機関や地域との関わりや互助関係が加速的に進み、活動しやすくなった。会員の増加に伴い、活動の内容が力強く豊富になり、地域での信頼と期待を担えるようになった。まだ一人で悩んでいる人が多いと思うので、もっと沢山のの人にこの家族会を知っていただき、援助で出来るようにしたい。

「認知症のある人」の不安や苦しみを聴き支えたい。

若年期認知症の支援。

家族と介護施設等のトラブル(苦情)に解決支援したい。

活動資金不足の解消。(年間予算は25名×2,000円です)

活動名	特定非営利活動法人 みつわ
要旨	高齢化する社会を考えるボランティアグループとして認知症の講演を中心に活動を開始。NPO設立後、古民家にてデイサービス、ホームヘルプサービスの他、介護保険外の宅幼老所を運営し、高齢者と子供達のふれあいの日常生活を提供している。
応募者	宅幼老所 笑びす 荒川 千代美
連絡先	〒849-2204 佐賀県武雄市北方町大字大崎 753 番地

(概要)

私たちは、平成15年から高齢者社会を考えるボランティアグループみつわの会として講演活動してまいりました。平成17年8月に「NPO法人 みつわ」として開設しました。

1. 介護される方 (高齢者・障害者)
2. 介護する方 (家族)
3. 医師・介護従事者

この三つの話しあいの輪をつくり和きあいあいと共に生き支えあうことをめざしています。

<目的>

- ・地域社会を豊かで住みやすくするために高齢者と子供達のふれあいの日常生活を提供することによって、福祉の増進と町づくりを推進する。
- ・自立の高齢者をはじめ、要介護状態、要支援状態にある高齢者に対し憩いの場所とし、また介護サービスを提供することを目的とする。
- ・普段生活の場の民家を改築し、高齢者と子供達が家庭の雰囲気の中で家族の一員として時間をすごす。
- ・介護予防にむけて、フットケアや生活リハビリなど、朝日町高橋の、まつお内科消化器科 松尾 功 先生のご協力のもと連携して、家族も安心して預けられる場所を提供する。

<事業内容>

- ・宅幼老所 笑びす 自立の方も参加のデイサービス
- ・指定通所介護、介護予防通所介護(デイサービス)指定事業所 2009 - 4171600325

<特徴>

- ・音楽療法 = 童謡やなつかし唄をみんなで歌う
- ・フットケア
- ・爪のケア = 血の道療法「血流を良くして健康維持」
- ・回想法 = 昔なつかしい畑作業や台所仕事や子供との交流
- ・介護保険では毎日開所、1日10名と低人数の家庭的なデイサービス
- ・訪問介護、介護予防訪問介護(ホームヘルプサービス)指定事業所 2009 - 4171600325
- ・フットケア・爪のケア = 血の道療法「血流を良くして健康維持」
- ・介護保険外 訪問介護サービス
- ・フットケアマッサージ
- ・講演(ボランティアグループみつわの会での延長行事)年1~2回
- ・病院協力体制 - まつお内科 消化器科 松尾 功先生

活動名	特定非営利活動法人 PAS ネットの活動
要旨	高齢者や障害者の権利擁護に関する相談・支援を行うNPO団体。一人ひとりに必要な権利擁護を行い、地域のシステムとして定着させるべく、法律・福祉・行政等の関係機関とネットワーク作りを展開。各地の権利擁護団体との横の連携にも参画。
応募者	特定非営利活動法人 PAS ネット 馬場 明日美
連絡先	〒662-0913 兵庫県西宮市染殿町 6-20 コーポラス・ベル 102

(概要)

特定非営利活動法人PASネットは、兵庫県西宮市を拠点に高齢の方や障害のある方の権利擁護に関する相談・支援を行なっているNPO団体です。

現在の日本の状況を見ると、少子高齢化の進行、また長期化する景気の低迷等により、地域で生活を営むうえで、何らかの社会的支援を必要としている人々の増加と、福祉サービスのニーズの増大が進んでいます。そのなかで、高齢者や障害者等のなかには、さまざまな権利侵害や消費者被害等に巻き込まれて苦しんでおられる方がいます。また福祉サービスの利用も契約制度が導入され、必要な権利行使を支援することや成年後見制度の利用ニーズも年々高まってきています。こういったなか、だれもが地域で安心してくらししていくために、ひとりひとりに必要な権利擁護の支援を行い、地域のシステムとして定着させていくことを目標に、平成14年に任意団体「にしのみや権利擁護支援センター」を立ち上げ、高齢者や障害者を対象とした権利擁護相談活動や地域の法律・福祉関係者とのネットワーク作りを始めました。

平成16年1月、NPO法人化し、「特定非営利活動法人PASネット」として認証を受け、新たな体制でスタートを切りました。以下に現在PASネットが行っている活動をご紹介します。

- 権利擁護相談
 - ・権利擁護なんでも相談（毎週火曜日、西宮市）
 - ・囁託専門相談（随時、西宮市障害者あんしん相談窓口「のみネット西宮」）
 - ・権利擁護専門相談（月2回、芦屋市）
 - ・権利擁護なんでも相談（月1回、尼崎市）
- 権利擁護支援
 - ・成年後見制度利用支援
 - ・法人後見、後見監督の受任（総受任件数：31件 2009.9現在）
 - ・後見人等の活動支援
 - ・虐待、権利侵害等の救済
 - ・福祉サービスに関する相談、利用支援（福祉サービス利用援助事業）

上記のほか、今年度は助成金事業として以下の5つの事業を実施しています。

- ・権利擁護支援者養成研修（木口ひょうご地域振興財団）
- ・地域における権利擁護支援システムの具体化に関する調査研究事業（厚生労働省）
- ・障害児者の権利擁護及び虐待の防止に関する調査研究事業（厚生労働省）
- ・全国権利擁護支援ネットワーク組織化事業（独立行政法人福祉医療機構）
- ・地域の権利擁護支援に関する啓発・研修ソールの開発とセミナー開催事業（日本財団）

権利擁護に関わる相談支援活動は、決してPASネットだけで行なっているのではなく、地域の法律・福祉関係者、行政、地域包括支援センターや障害者相談支援事業所等の関係機関と連携・協働しながら行なっています。このひとりの人を支える「支援の輪」が日本のあらゆる地域に広がっていくことを目指し、日々活動しています。

活動名	特定非営利活動法人シビルブレインの活動
要旨	弁護士をはじめ多種にわたる専門職の会員が集まり、法人として成年後見活動を遂行。組織性を活かしたチェック体制により公正かつ適切な成年後見業務が図られており、第三者による成年後見の普及に尽力している。
応募者	特定非営利活動法人シビルブレイン 伊落 智
連絡先	〒540-0012 大阪市中央区谷町 1-3-17-309

(概要)

シビルブレインは弁護士・税理士・司法書士・行政書士・社会保険労務士・ファイナンシャルプランナー・大学講師等の多種にわたる専門職の会員が集まったNPO法人です。会員が多種にわたる専門職で構成されているため、ワンストップで様々な問題に対応でき、多様な問題に対応したノウハウを蓄積できるという、この特色を活かして成年後見の支援事業を行うようになりました。

地域の方々に成年後見制度を知って頂くために、成年後見制度が創設されて間もない平成13年度に私たちが主に活動している地域である堺市と協働しながら市長申立のマニュアル作成に携わりました。また堺市の後援で一般市民や介護・福祉事業にかかわる専門員向けに成年後見制度の説明や実務に関する講演を開催しました。加えて、成年被後見人等の受皿となるべく、法人による成年後見人として活動しています。当法人は堺市では初めてNPO法人として市長申立の成年後見人候補に挙げられ、家庭裁判所により成年後見人に選任されました。その後、当該地域に限らず、高槻市民や高石市民の成年後見人及び保佐人に選任され、成年後見活動を遂行して参りました。

成年後見事業の主たる内容として、身上監護と財産管理があります。身上監護では、担当者が月1、2回の訪問を実施し、できる限り正確に被後見人の近況を知り、問題を把握できるよう工夫しています。財産管理では主に日常生活において必要となる費用(光熱費や家賃等の生活費用の支払い、成年被後見人が福祉施設の入所者である場合には施設利用料)を支払います。確定申告や納税の手続き、各種保険に関する手続き等(介護保険の更新や高額医療費の支給申請等)も行います。また、成年被後見人の負債整理や、詐欺等により財産が侵害された場合の財産回復処置も行います。財産管理業務においては、日常生活関係以外のイレギュラーのケースであっても、当法人の特色である幅広い専門性や組織性を活かした、迅速で適切な対応を心掛けて参りました。

更に、当法人では、法人という組織性を活かし、組織内で成年後見業務のチェックができるように、月に一度ミーティングを開き、各会員がそれぞれの担当する成年被後見人に関する報告をします。これにより、問題点をともに検討し、公正で適切な成年後見業務が図ることができま

す。平成20年には、これらの地道な活動が認められWAM(独立行政法人福祉医療機構)から助成金を頂きました。この助成金により、平成20年に堺市内に成年後見支援センター「クローバー」を開設し、センター内での無料相談の受付を開始することができるようになりました。また、同じ助成金事業として毎月無料相談会を開催し、当該年度においては26件今年度においては現在13件の相談を受付けました。最近では当法人が成年後見人を担当していた成年被後見人の遺言執行者にNPO法人として選任され、成年後見事務だけにとどまることなく支援事業の幅を広げております。

現在、成年後見制度利用者の増加も予想されますが、裁判所の統計では未だ親族による成年後見が過半数を占め、親族以外の第三者による成年後見が不足していることが覗えます。かかる現状に留意し、成年被後見人等をはじめとする成年後見制度利用者に対し、法人による成年後見という一つの選択肢を提供するという、大きな責務を担って成年後見制度の普及に携わっていく所存です。

活動名	だれもが不自由なく旅を楽しむ観光バリアフリーをめざして
要旨	民間団体と行政の協働で検討委員会を設立し、「観光バリアフリー」をテーマに、啓発講座の開催や観光地・商店街等の調査活動を実施。この実績を踏まえ、認知症高齢者を含む全ての人たちが旅を楽しむ観光バリアフリーを目指した事業計画を推進。
応募者	岩浦 厚信（宮崎市バリアフリー検討委員会 元事務局担当）
連絡先	〒880-8505 宮崎県宮崎市橘通西1丁目1-1 宮崎市役所建設部住宅課

（概要）

宮崎市の人口は平成20年10月1日現在で369,427人、そのうち65歳以上の老年人口は77,135人であり、高齢化率は20.9%です。また、身体障害者、知的障害者及び精神障害者の手帳交付者の総数約2万人と、老年人口を合わせた数は9万7千人を超えており、数多くの人たちが移動に制約がある人たち、あるいは移動制約の可能性があると考えられます。

宮崎市では「九州一の健康福祉都市」づくりを掲げて様々な福祉施策に積極的に取り組んでいます。そして、平成13年4月に宮崎市福祉のまちづくり条例（以下「条例」という。）を全面施行しました。条例は、「市民福祉の推進」と「対象施設の整備」を柱に、市民協働を理念として市民が自立し、相互に支えあう精神のもとに福祉のまちづくりを推進するよう定めており、この条例に基づき2004年3月に市民活動団体や事業者団体、行政の市民協働で「宮崎市福祉のまちづくり総合計画」を策定しました。この計画に基づいて民間10団体と市役所4課の協働で活動する宮崎市バリアフリー検討委員会を設立して「観光バリアフリー」をテーマに、2005年2月から4年間にわたって、毎月1回程度の定例会を開催して以下の活動を行いました。

啓発を目的に「観光バリアフリー連続講座」の開催や、宮崎市の観光地や商店街等の点検調査活動を行い、その情報をタイムリーに紹介するブログ「宮崎観光バリアフリータイムリーニュース」(<http://miyazakikanbari.miyachan.cc>)やこのブログと連携する「宮崎観光バリアフリーホームページ」(<http://www.miyazakikanbari.com/>)を作成して、「どうしたら行けるか」という宮崎の観光バリアフリーの情報提供を行いました。ブログは、開設した2007年11月28日から2009年9月末までに3万件以上のアクセスがあり、現在も宮崎の観光バリアフリー情報を提供しています。

そして当会の活動の締めくくりとして、また連続講座の最終回として、2009年3月14日（土）に宮崎市のカーリーノ宮崎ガガイトコミュニティホールにおいて「第7回観光バリアフリー講座」を開催しました。大会テーマは「福祉文化と観光バリア・フリー～だれもが住みよく行きよいまちをめざして」です。講演者の日比野正己氏（長崎純心大学教授）は、「認知症高齢者の旅行が次の重要な課題になる。これからは日本だけでなく中国など世界的に認知症の人の観光が課題になる。」と述べて、講演後に日比野氏がコーディネーターを務めた福祉文化サミット（パネルディスカッション）においても、知的障害者や認知症高齢者の旅行のこと、先駆者の築いた障害者の旅行のこと、そして宮崎の観光バリア・フリーへのアドバイスなどの話から、「旅は人権」「人づくり」「人々のつながり」「ボランティア」「誘う」「満心度」などの観光バリア・フリーのキーワードが次々と導き出されました。これらは宮崎の今後の観光バリアフリーの方向性を示すものと思われました。宮崎市では、進行中の青島再開発事業のなかでバリアフリーツアーセンターを作る計画をたてており、宮崎市バリアフリー検討委員会の実績を踏まえて実現しようと考えています。めざすのは認知症高齢者を含むすべての人たちが不自由なく旅行を楽しむ観光バリアフリーです。

活動名	地域の人、認知症の利用者の人も、共に活動する「生き生きサロン」
要旨	認知症の義母の看取り後、認知症介護サービスの現状を変えたいとの思いでNPO法人を設立。介護保険のデイサービスの他、自主事業として近隣の人の協力を得ながら生き生きサロンや介護相談会を民家で展開。
応募者	特定非営利活動法人シルバーサービス憩いの汀 西口 和代
連絡先	〒514-0013 三重県津市海岸町 14-20

(概要)

1999年7月、義母の認知症介護を終えた西口和代が、認知症介護サービスの現状を変えたいとNPO法人を設立。家族、友人、知人を巻き込んで宅老所を始めた。2000年4月介護保険に一部合流し、デイサービスを介護保険で、その他の事業は自主事業として展開し現在に至っている。

(活動内容)

1) 介護保険内でのデイサービス363日利用可能(元旦と元旦2日目を休む)

特別の事情が起これば、1日、2日も受け付ける

2) 時間延長、朝8時～夜8時迄利用可能(実際には、朝6時すぎから利用者有)

3) 自主事業

デイサービス 憩いの汀 で受け付け(内容は上記と同じ)

泊まり 憩いの汀 (夕方6時～朝8時まで)

生き生きサロン 毎日1回、第4土曜日、11時～3時(昼食付き)

年1回、日帰り旅行、デイサービス利用者、家族を中心に地域の方も参加。

介護相談会 毎月第3土曜日、10時～12時、“認知症と在宅介護を考える会”として開催。

(活動の成果)

今年、11年目に入った。福祉の事には素人だった者が、自分の義母の認知症の看取り後、始めた。介護保険前、一日3,500円で利用してもらい、スタッフはボランティアで友人、知人を引っぱりてきた。マザーテレサがインドの道端で死にかけている人を、死を待つ人の家に連れ帰り、「よく頑張って生きましたね。私はあなたのこと、尊敬します。神さまもあなたのことを喜んでおられますよ」と語ると、その老人は「私は今まで獣のように生きてきましたが、マザー、今は天使となって死んでいけます」と応えた。

日本の介護の現場、医療の現場はどうだろう。豊かな豊かな日本で、反対のことが起こっていないだろうか……。義母を見て、又、それをとり巻く介護現場、医療を見て、11年前、このままだったらたまらないと思った。しかし、今はその時より、医療の現場はひどい状況になってきている。介護保険が始まり、やっと医療で見捨てられた人が支えられ、生かされているという現状で、果して成果はあったのか……。認知症の人にとって、“この町はだいじょうぶ”と言えるだろうか？。高いハードルを倒すことはあっても、越えることはできないでいることが現状だろう。

生き生きサロンを始めて5年になる。近隣の方々に理解を得たいと思い始めた。初めは10人程の参加者だったが、今は40名程の参加になった。ありがたいことだ。しかし、まだまだ認知症の方々を“やっかいな人”、介護現場を“金もうけ”ととらえている人も少なくない。

(今後の展望)

認知症の人々、又家族に「認知症で良かった」と言ってもらえたら、その方、又その家族に対してのケアは成功だろう。地域の方々の理解をもっと得、行政、医療ともっと関係を深め、活動の幅を広げたいと考えている。特に、認知症でも若年の方々、又お元気で活発な方々の為に、2010年度には屋外に出て、地域の為に活動できるデイサービスを始めたいと考えている。JA等とも協力し、海岸のゴミ拾い、街中、なぎさまちの清掃を考えている。介護保険もやっと屋内に閉じ込めるのではなく、外に出るケアに道を開き始めた。設立趣旨書に書いた初期の思いを達成した。

活動名	お互いに助け合える地域づくり 有償たすけあいシステム コープおたがいさままつえ
要旨	生協の組合員どうしの助け合いシステムとして立ち上がった“おたがいさま”の活動を、組合員にこだわらず誰もが利用できる地域の支え合い活動に拡大。他団体とも連携し、地域の団地の高齢者や、認知症の方への支援をすすめている。
応募者	おたがいさままつえ 代表 高橋 玲子
連絡先	〒690-0017 島根県松江市西津田 1-10-40

(概要)

生活協同組合しまね(生協しまね)では2002年に、困ったひとが気軽に利用でき、自分に来ることで社会に役立ちたい想いを持つ人をつなぐ、組合員どうしの助け合いシステムとしての”おたがいさま”を、顔の見えあうエリアで「私達の町につくろう」と意志を持った人が集まった人たちで、自らが主体となる組織として立ち上げました。

そして、松江、雲南、大田と運営する組合員の「自主・自立」を大切にして、地域に活動を広げてきました。この活動実践の中で、「組合員限定」へのこだわりより、地域に住むみんなの支え合いの中に、“おたがいさま”の価値や意味を求める方向で歩み始めると、地域との多様な相互の役立ち関係が広がり始めています。

<安心して子育てができ、年をとっても安心してすごせる、住んでいてたのしくなる地域づくり>
おたがいさまの概況～ (平成20年4月～21年3月)

	2008年3月実績			2008年度累計(4月～当月)			応援者登録数
	応援時間 (時間)	延べ応援 者数(名)	延べ利用 者数(件)	応援時間 (時間)	延べ応援 者数(名)	延べ利用 者数(件)	
いずも	515.5	304	280	5969.0	4024	3834	262
まつえ	362.5	166	158	5569.0	2476	2372	336
雲南	173.0	117	103	1969.0	1269	1090	205
計	1051.0	587	541	13507.0	7769	7296	803

おたがいさまの現在の動き～

おたがいさまの活動は、組合員同士の助け合いとして活動をしてきましたが、平成21年度から利用者は組合員という枠をはずし、だれでも利用できるようになりました。21年度からはじまった大田では、利用者、応援者も組合員の枠はなく、だれでも活動に参加できることになりました。地域の団体との連携を積極的にとり、そのつながりが応援の広がりをつくっていくことをめざしています。

「おたがいさままつえ」 助け合いのしくみ

「おたがいさままつえ」は「おたがいさまいずも」に続いて、島根県東部をエリアに平成16年に発足しました。「あー、困った」「ちょっと誰かの手を借りれたら」、そんな方を応援しています。

生協しまね の概要

昭和59年11月に設立。組合員数は58,937人。(2009.3月末現在)

活動エリアは隠岐郡を除く島根県一円。事業所数は7支所。

有償ボランティア組織(おたがいさまいずも、おたがいさままつえ、おたがいさま雲南、おたがいさま大田)の活動を各地で展開。

活動名	トラベルヘルパーの外出支援活動
要旨	介護技術を身につけた外出支援・旅の専門家「トラベルヘルパー」の育成とともに、全国の行政や諸団体と協働して「介護旅行システム」の全国整備に努め、行動に不自由がある人もどこへでも行ける仕組みづくりをすすめている。
応募者	NPO法人日本トラベルヘルパー協会/株SPIあ・える倶楽部 宮下 典子
連絡先	〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂 1-19-13 トップヒル並木ビル 10F

(概要)

トラベルヘルパー（介護支援専門員）は、介護技術を身につけた外出支援、旅の専門家です。健康に不安がある人や身体に不自由がある人の外出希望や介護旅行の支援活動、社会参加による介護予防、認知症予防を行います。NPO法人日本トラベルヘルパー協会では、「トラベルヘルパー」の育成と「介護旅行システム」の全国整備、旅のユニバーサルデザイン化に努めて参りました。

「旅は最高のリハビリ」という言葉がありますが、これを科学的に実証する必要がある一方で、私たちは市民活動に根ざし「行動に不自由にある人もどこへでも行けて役立つ仕組み」を創ることを目指しています。

トラベルヘルパーが求められる場面

お買い物、お稽古ごと等の簡単な外出の介助から、長年の夢や一生に残るような旅まで、さまざまです。他にも冠婚葬祭、同窓会、観劇、音楽会、墓参り、グルメ、家族旅行の同行、思い出の地訪問、温泉旅行、温泉施設におけるスポットの入浴介助など多岐に渡っています。「催しに参加する」「友人と再会する」等、外出目的がはっきりしているものが多いのが特徴です。また、施設に入居している方に対しての「外出して食事をしたい」「家に帰りたい」という短時間の同行もあります。要介護の方とトラベルヘルパーだけの外出もあれば、家族の負担を軽減するという目的で、トラベルヘルパーが同行する場合があります。トラベルヘルパーが同行することによって、家族には旅を楽しむ余裕が生まれます。

旅は最高のリハビリ

要介護になっても、認知症になっても、外に出かけ、旅行に出かけることができます。本人の思いと周囲の協力があれば実現する方法はたくさんあるからです。「出かけよう」と決めた時から、閉じこもりがちな生活にリズムが生まれます。例えばどんな洋服を着ていこうかという準備から始まり、旅が終わった後には写真を見ながら思い出を振り返る楽しみもあります。もちろん、旅先では五感にたっぷり刺激を受け、温泉にゆっくり浸かることで心身ともにリフレッシュし、めったに見られないような笑顔がこぼれることもあります。

高齢な方々が、その瞬間を楽しんで生きている姿は、本人だけでなく周囲の人たちにも喜びと希望を与えるものです。要介護になっても、認知症になっても、気兼ねなく、安心して出かけられるような施設や街を整えることは、すべての人にとって居心地の良い空間をつくることにもつながっていきます。

活動名	佐竹台サロン
要旨	公営団地の建て替えを契機に、地区住民と社会福祉協議会が中心となり、団地の1階にサロンをオープン。“気軽に立ち寄り、コーヒーでも飲みながら井戸端会議をしませんか”をキャッチフレーズに、住民の憩い場を提供している。
応募者	社会福祉法人 吹田市社会福祉協議会 森本 大介
連絡先	〒564-0072 大阪府吹田市出口町 19-2

(概要)

「誰もが集える居場所をこの地域に作りたい。」

吹田市社協と佐竹台地区福祉委員会との懇談会の中での委員さんのこの発言から全ては始まりました。

佐竹台地区は、大阪万国記念博覧会の開催を契機に開かれた千里ニュータウンに位置し、その中で一番初めに街開きが行われた地区です。当時、時代の先端を走っていた公営団地も街開きから50年近く経ち、老朽化が激しくなってきました。また、建物などのハード面だけでなく、そこに住む住民の高齢化も激しく、地域でのつながりが希薄になり、孤立という大きな課題を抱えています。

老朽化した公営団地の建て替えという新たな街づくりを契機に、新たなコミュニティの構築を目指したいという機運が高まっていました。

そこに厚生労働省の補助事業である「公営集合住宅における要援護者見守りシステム構築事業」を大阪府社協から受託することになり、佐竹台地区をモデルに団地での孤立・孤独死を防ぐためのシステム作りの調査・検討をすることになりました。その一環として、地区内の団地に住む全1,075世帯に対して、日常生活についてのアンケートを実施しました。その中で、“あったらいいなと思うサービス”ということで、「気軽に相談できる場」、「地域で集える場」という回答が多くみられました。このように地域で抱える課題と住民が希望していることが合わかり、「佐竹台サロン」の取り組みがスタートしました。

元々、建て替え工事が着工されるまでに業者と住民の話し合いが密にされていたこともあり、団地外の住民も最寄りの駅まで団地の中を通り抜けることができるような遊歩道を作り、その道中に気軽に立ち寄れる集いの場を確保することができました。

「佐竹台サロン」は、“気軽に立ち寄り、一杯のコーヒーでも飲みながら井戸端会議をしませんか”というキャッチフレーズで、(月)から(金)の12時から16時までオープンしており、地域の内外を問わず、住民が立ち寄り、ボランティアさんが入れるコーヒーを飲みながら多くの方が集われています。この地区の高齢化は、吹田市内でも高く、地域からの孤立に加えて介護に関する需要も高くなってきています。認知症があってもそのことが理由で地域から孤立することがないようなコミュニティを作る重要性を強く感じています。外に出かけ、色んな人とコミュニケーションをとることで新たなつながり作り、ひいては介護予防や認知症予防にもつながればよいなという思いで活動されています。また、吹田市社協に配置されているCSW(コミュニティ・ソーシャルワーカー)が毎月第1・3(木)の12時から13時半まで、サロンで福祉相談会を実施し、介護保険制度へのつながりを始め、様々な福祉相談に対応することで支援が必要な住民をフォローする体制もとっています。

活動名	認知症になっても安心して暮らせる街づくり～「お父さんごめんなさい」から歩き始めた日々～
要旨	脳梗塞の父を介護した経験とその後の認知症介護の勉強を経て、「一人でも多くの人に認知症を理解してもらいたい」との思いで、講演会活動や認知症サポーター養成などの活動に尽力している。
応募者	彩和グループ 統括本部 統括管理者 土井 千代子
連絡先	〒343-0037 埼玉県越谷市恩間新田 383-1

(概要)

私の父は53歳で脳梗塞を発症し、66歳という若さで亡くなりました。今であれば、脳血管性認知症という診断名だったかも知れません。

私が17歳から30歳までの13年間という、長期にわたる家族介護でした。その間、私は結婚し3人の子供を授かり、育児と仕事と介護に母と二人で何とか乗り切ったという精神的にも、経済的にも追い詰められる日々でした。

その当時は、何も考える余裕すらなく、自分達が生きていくのが精一杯でした。父が亡くなり、私達家族は普通の生活を取り戻すことができました。

私も、父が入院していた老人病院を、一年後に退職し、好きな外科病棟・手術室勤務の看護婦に戻りました。その当時、私は老人看護が好きではありませんでした。

私の人生が大きく変わったのは、介護支援専門員の試験に合格した時から、始まったのかも知れません。

介護保険制度のスタートと同時に、介護療養型病床群、介護保険制度と共に成長というか、知識を得る機会が増すごとに、私の中で疑問から後悔へと変わっていったのです。

最初は「あの頃、介護保険制度があったなら」という後悔から始まりました。しかし、それが弁解でしかないことも、私の中ではわかっていました。

だからこそ、大好きな医療法人での勤務を諦め、認知症の勉強を営利法人に身を置きながらグループホームという環境から始めたのだと思います。

認知症ケア専門士、主任介護支援専門員と認知症の勉強を深めるたびに、私の中で後悔は日に日に大きなものとなり、「言葉」を失った父を理解しようとしていなかった自分、どんなに孤独感を感じさせてしまったか、虐待ではないか、と考えた時、取り返しのつかない後悔と「お父さんごめんなさい」の思いで、墓参りに行くこともできなくなってしまったのです。

そんな自分から、「卒業」するために、私のような後悔をする人間を少なくできれば、介護保険制度を上手に活用することにより家族介護の負担軽減が図れれば、悲劇の軽減に少しでも貢献することにより、父は許してくれるのではないかと考え活動を始めることしか術がなかったのです。

最初は、研修会資料・認知症ケア専門士のテキスト・様々な本から資料を作り、パソコンが苦手な自分がパワーポイントの資料を作れるようになりました。

そんな手探り状態で、「一人でも多くの人に認知症を理解してもらわなければ」と焦りを感じていた時、キャラバンメイト養成研修を受講することができ、「目標」を立てることができたのです。

「100名の人に、認知症サポーターになってもらうことが出来たら、父の墓参りに行こう」どれだけ救われたかわかりません。その活動をまとめたものを報告させていただきます。

活動名	若年認知症サポートセンター「絆や」
要旨	「若年性認知症の方の居場所がない」の声をうけ、家族会、地域包括、グループホーム等が協力し、商店街の中にセンターを開設。「働く」「ネットワーク作り」をキーワードに、集える場所の提供や、就労支援事業、啓蒙・啓発活動などを行う。
応募者	古都の家 学園前 若野 達也
連絡先	〒631-0073 奈良県奈良市二名東町 3750-2

(概要)

平成21年4月、奈良市に開設した若年認知症サポートセンター「絆や」は、地域の中で「若年認知症の方の居場所がない」「病院も施設も、若年認知症ということで、入院・入所を断られる」「デイサービスも高齢者対応で、本人が嫌がって利用しない」等の声を聞き、地域の若年認知症サポートに関わる人々（若年認知症家族会「朱雀の会」、地域包括支援センター、当グループホーム（古都の家学園前）、デイサービス、医療機関等の関係者）が集まって、「若年認知症の方を地域でサポートするにはどうすればいいのか」という課題を考え、実現した事業所です。

「絆や」のキーワードは、「働く」と「ネットワーク作り」です。これを実現し、地域でいきいきと若年認知症の方が生活できる環境作りの第一歩となるよう願いをこめ、スタートしました。

若年性認知症の方が集うことのできる場の提供

若年認知症家族の会「朱雀の会」と「古都の家 学園前」が共同で、中登美ヶ丘の団地内の商店街に「古都の家 認知症サポートセンター」を設立。1Fを若年認知症の方が利用できるフリースペース、2Fを朱雀の会の事務所とし、若年認知症の方が気軽に立ち寄れる場所を作りました。

就労支援事業

若年認知症の方の「仕事がしたい」「役に立つことがしたい」等の声にどう支援していくのかを地域のみんなで考え、東京での支援状況を参考にし、働く場として、「古都の家 認知症サポートセンター」内に、若年認知症サポートセンター「絆や」を作りました。仕事内容は、地域包括等に相談に来る介護保険外の相談（独居老人の方の家の草むしり・窓ふき等）に対して、「絆や」ができるお仕事をさせていただく。地域のグループホームやデイサービス等の事業所での、メンテナンス（洗車・草むしり・掃除等）の仕事をいただく。地域の専門職の勉強会や講演会のポスター作りや配布等を行う仕事をいただく。団地内での配布物を配る仕事をいただく等です。介護保険や自立支援法等の制度上での事業でないため、少しでも働いてお給料を渡せるよう努力しています。

啓発・啓蒙

若年認知症の方が名刺を持って、仕事受注に出ています。専門職も、若年認知症の方々と直接話をするのが一番の理解につながると実感しました。「絆や」を商店街に開くことに商店街の方々も最初は難色を示しましたが、当事者が商店街で買い物をし喫茶店に行くことで理解が広まりました。今は、商店街の方々も仕事の斡旋や声かけなど積極的に協力してくれます。若年認知症の方が、地域で働き・地域に貢献し・地域と交流することが、地域への1番の啓発・啓蒙になっています。

若年性認知症に関わるネットワーク会

若年認知症に関して、各事業所はどう対応すべきか悩んでいました。情報もなく、朱雀の会や全国の先駆的事业所に支援方法を教えてもらいました。そんな中、地域の各事業所が集まって事例検討会を行いました。現在、奈良市を中心とした多くの事業所がネットワーク作りと若年認知症の勉強会や啓発・啓蒙活動に取り組んでいます。

活動名	健康麻雀教室活動による認知機能低下予防事業（いきいき健康マージャン教室）
要旨	認知症機能低下予防策として健康麻雀を活用し、医学的支援と効果検証の体制を整備。参加者はルールに慣れてくると親交も深まり、健康麻雀が自主的に継続されるようになり、“楽しみながら認知機能低下予防”が効を奏してきている。
応募者	東内 順子（NPO法人活気会） 堀川悦男（佐賀大学医学部） 十時忠秀（佐賀県医療統括監）
連絡先	〒840-0804 佐賀県佐賀市神野東 1-3-17-305

（概要）

1) 認知機能低下予防策としての健康麻雀 - アルツハイマー病の原因や脳画像による早期診断等の研究も急速に進展してきたが、根本的治療法はなく、認知症に関する啓蒙活動や地域で支える仕組み作りが必要である。また地域住民には、少しでも認知症になりにくい生活への要望がある。近年の研究（Verghese 2003）等で趣味や余暇活動と認知機能低下予防の関係が報告され、身体・知的活動内容を豊かさや頻度を上昇することが有効との結果であった。このような中、本プロジェクトの提唱者である東内は、佐賀県立病院好生館看護部長、佐賀県介護実習普及センター長などの経験から、認知機能低下を予防できる生活を地域住民に勧める必要があることを痛感し、健康麻雀の活用を思いついた。

麻雀を覚えることには、新たな知的活動や学習、仲間作り、閉じこもり予防などの効果が期待できる。麻雀は4人で会話しながら行うため、社会性の維持にも効果があり、ゲームを行いながら認知機能低下予防に効果があれば、一石二鳥以上である。「飲まない、喫わない、賭けない」の健康麻雀3原則によりイメージが大きく変わり、公民館活動や自治体の保健福祉政策とのリンクも可能となり、佐賀市中心部の公民館で開催が承認され、且つ東内が所属するボランティア集団、NPO活気会の協力を得て、平成19年に初回を開講する運びとなった。

2) 医学的支援、効果検証 - 東内は健康麻雀を普及し認知症を支える仕組み作りを進める上で、健康麻雀の効果検証や医学的な評価が必須と考え、佐賀県医療統括監である十時（前佐賀大学医学部附属病院長）に支援を依頼した。十時は、同医学部認知神経心理学分野の堀川に協力を求め、共同での支援活動が始まった。また、認知症に対する知識の普及啓蒙として、健康麻雀教室の開校式にて、十時の講話と堀川の認知機能に関する説明が行われ、医学的支援と効果検証の体制が整った。

3) 教室開講と認知機能測定 - 参加者は初めて麻雀を経験する人々であり、20人ほどの申込者が合計20回程度の教室を受講した。麻雀を教授するボランティアが各テーブルについて、教室を進行させた。開講の翌々週頃にMMSEを含む認知機能検査を佐賀大学大学院生が行い、麻雀教室の最終回直前にも同様の測定が行われた。現在、効果検証のため統計解析を行っている。

4) 参加者の感想、自主グループ形成 - 当初難解だった用語やルールに慣れると、麻雀は参加者の共通の話題となり、「頭がすっきりした感じがする」、「計算が苦にならなくなった」、「仲間と会うのが楽しみ」などの反応が得られた。特筆すべきは、麻雀教室終了後に参加者有志が自主的に企画運営する健康麻雀が継続されていることである。“楽しみながら認知機能低下予防”が功を奏し、継続の動機づけを高めたのであろう。

5) まとめ - 平成21年度に佐賀地域での健康麻雀は3カ所に増え、他地域でも計画されている。

“楽しみながら”をキーワードに地域での認知症への理解と支援活動を継続する予定である。

謝辞：健康麻雀教室開催にご協力いただいた、佐賀中部広域連合、各公民館や社協、そして麻雀指導のボランティアグループ各位に感謝申し上げます。

活動名	明和町に「家族会」を。
要旨	介護保険事業所の職員と病院職員の有志が中心となり、家族会を「この町に存在することに意義がある」と考え発足。誰もが気軽に話せる座談会を心がけ、時に「行政相談会」になるなど、行政とも連携しながら型にはまらないスタイルで運営している。
応募者	明和町介護者の会実行委員会 田西 隆好
連絡先	〒515-0333 三重県多気郡明和町坂本 1179-10

（概要）

介護保険事業所の職員と病院職員の有志が中心となり『家族会』の運営にあたっています。

開催1ヶ月前に、前回参加者へ案内はがきの送付、ポスターの掲示（地域の病院、医院にお願いします）地域の介護事業者へ案内チラシの配布、紹介の依頼等を行い、開催の周知を図ります。当日は参加者全員車座に座り、司会挨拶の後、ひとりひとり自己紹介を兼ね、普段思っていることを話していきます。テーマ、持ち時間は決めません。介護疲れの大変さであったり、介護保険制度へのお尋ねであったり……。途中、発言者への質問や賛同の意見がある時はできる限り話して頂きます。一巡し、参加者全員が何らかの発言をして頂く頃に予定時間（2時間）が終了……。大体これが当日の流れです。

平成19年5月に第1回を開催、私達自身「難しい事はできこないのだから」と、ただ「この町に『家族会』が存在すること」を目標に3ヶ月に一度の開催を続けてきました。特に何かを企画することもなく、これまで続けられたことは、想像を超える多くの方、様々の立場の方に参加を頂いたからに他ありません。『嬉しい』というより、『もっと、大きなことができた筈』と力不足を痛感しています。町議会の一般質問の場で取り上げて頂いたり、行政の方との意見交換の場になったり……。多くの方との出会いは、いつの間にか、この集まりを一人歩きさせていたようです。今後は、私達が置いてきぼりにされることのないよう、努力していかなければと思っています。

（活動の成果と今後の展望）

特に多方面に声をかけたわけではなく、というより意見の不一致からくる企画倒れを避ける為に、あえて限られた人数でスタートした小さな集まりですが、それなりに広がりを持つことができたのは、この地域にそれを可能にしてくれた、下地が出来上がっていたからにほかありません。「家族会やるか?」「やろう、やろう」それだけの言葉だけですぐに6人ものメンバーが集まったことは、「皆、内に秘めた思いは同じ」だからだと思いますし、手本とする「家族の集い」は全国で活躍されています。町議会議員の方にこの会の存在を知って頂いたのは社会福祉協議会が主催する介護教室です。生意気にも『介護家族のために』『介護疲れの発散に』等考えてスタートしたわけですが、ご家庭で介護に携わっている介護者の方は、何よりの資源であることに気付かされました。

「地域資源の活用」幾度となく聞かされてきた言葉ですが、この集まりは貴重な地域資源の集合体です。私達はこの集まりを、範疇によって類別することなく、「家族会」でも「茶話会」でも「明和町の福祉を考える会」であってほしいと考えています。「このへんで、何かもうひとつ」「主催を一般参加の方に任せてはどうか?」「小旅行を企画しては?」「今の、このスタイルが大事」……。これからの方向については意見の分かれるところもありますが、やはり「何をするか?」よりも、これまで関わって頂いた多くの方が、もっともっと活躍して頂ける場になればと思います。

活動名	わか町、飯田でサポーター養成講座、そして、キャラバン・メイト地域づくりにがんばってます
要旨	認知症を知り、理解のある地域づくりを進めようと、地域の事業者向けに認知症の学習会を開催。その後、サポーター養成講座、さらにはキャラバンメイト研修を実施し、地域での啓発活動に尽力している。
応募者	飯田市上久堅まちづくり委員会 認知症疾患医療センター 民生児童委員協議会長 椎名 佑平
連絡先	〒399-2611 長野県飯田市上久堅 3731

(概要)

私ども飯田市の場合は下記のような状況で、認知症の学習会を実施してきました。

平成15年飯田病院在宅介護支援センター時代に、認知症について、高齢者痴呆介護研究・研修東京センターの永田先生に講演会をお願いいたしました。350名の聴講者を迎え、素晴らしいお話を頂きました。その後、先生の監修された「だいじょうぶ だいじょうぶ」を教科書に次の内容を実施しました。

まずは地域の事業者向けに学習会を開催。

平成18年度より飯田市から「認知症高齢者見守り事業」の委託を受け、「認知症サポーター養成講座」を開催。

講師は認知症介護指導士が飯田の地域には資格者が存在しない為に他市で遠く離れた駒ヶ根市から講師をお願いしました。

18年～20年度 79箇所 2020名のサポーターが誕生しました。

平成20年 飯田市よりキャラバンメイトの養成の要望が出され、昨年はじめてメイトの養成講座を開催。47名のメイトが誕生しました。今年度もこの12月に養成講座開催の予定で準備中です。

今回メッセージを寄せてくれた椎名様は、民生児童委員で、かつ第1回目のメイトの1員です。市のメイトを受講された他の皆さんも遅れてはならないと学習会の開催に努力され始めています。

<地域紹介>

飯田市は、長野県の南部に位置する、豊かな自然に囲まれた魅力あふれる地域です。

江戸時代には飯田藩の城下町として栄え、現在はりんご並木・人形劇の街として発展しています。城下町の面影を残す町並、今にも残る伝統芸能の多さから南信州の小京都といわれています。また「環境文化都市」として太陽光発電などにも力を入れています。

飯田市の人口は、平成21年4月現在、105,867人で、内65歳以上の人口は29,440人、高齢化率は27.8%となっています。75歳以上は16,341人で全体の15.4%を占めています。

活動名称	共生を軸とした認知症地域支援の取り組み～支えられる存在から支え合う力を生み出す存在へ～
活動要旨	アパートの1階を全て借り切り、 独自事業の地域開放スペース 認知症デイサービス 認可外保育施設の3つの事業を行う。皆が一つの空間に集まることにより、自然な関わり合いが芽生え、支え合う力を生み出す力へと導かれている。
応募者	NPO法人 地域の寄り合い所 また明日 森田 和道
連絡先	〒184-0014 東京都小金井市貫井南町 4-14-14 ヴィレッジ・パル1F

(概要)

【『また明日』とは?】

NPO法人地域の寄り合い所また明日(以下『また明日』)は、大家様と隣近所の皆様の大きなご理解のもと、東京都小金井市内にあるアパートの一階を全て借り切って、平成18年12月より本格的な活動を開始いたしました。

少子高齢化が進行した現代の地域社会の中で、悩みや問題を抱える方々やご自分の心の居場所を求める方々の拠り所となることで、「また明日も頑張ろう!」という心の余裕を感じて、今度はその人達が自分の周りの人に余裕をお裾分けしていただくことが、『また明日』の願いです。

つまり、専門施設が直接すべての問題を解決するのではなく、地域に暮らす方々ご自身が、再び地域社会の『支え合う力』の担い手となることで問題が解決に導かれていくよう、その力を引き出し側面から支援していくことを目的としています。

【『また明日』の活動】

『また明日』は目的達成の為に、下記の3つの事業の運営を一体的に行っています。

(1) 独自事業の地域開放スペース『寄り合い所』

いつでも気軽に立ち寄って交流することができる場所の提供です。利用料は「100円程度」で、登録や予約の必要はありません。『また明日』の理念を実行する為の中心事業と位置づけています。また、介護保険や保育に当てはまらないケースは、全て『寄り合い所』でお受けするようにしています。

(2) 小金井市指定の認知症専門デイサービス『また明日デイホーム』(以下『デイホーム』)

定員12名の認知症をお持ちの方専門のデイサービスです。『また明日デイホーム』の介護方針は、ご利用者様の心が動くような環境や声掛けをとおして、お一人お一人の自然な体の動きを引き出す介護の実践です。

(3) 認可外保育施設『小さな保育園 虹のおうち』(以下『虹のおうち』)

定員8名の文字通り小さな保育園です。『虹のおうち』の保育方針は、園児と保護者の皆さんに“第2の実家”と感じていただける雰囲気をお大切にしつつ、武蔵野の自然の力を借りながら、園児自身が感じ、園児同士が関わっていく保育の実践です。

この3つの事業は、仕切りの無い同一空間で行われています。しかし、集った方々がずっと一緒に過ごすのではなく、『寄り合い所』『デイホーム』『虹のおうち』それぞれに職員を配置して、別々の時間が流れるようにしています。そして、3つの事業を統括するコーディネーターも配置して、皆さんが一つの空間に集っていることによる自然な関わり合いが其処彼処で芽生えるように配慮しています。

活動名称	熊本県における行政・関係団体・県民が一体となった認知症でもだいじょうぶなまちづくり
活動要旨	認知症対策を県の重点施策の一つとして、「認知症になってもできるだけ住み慣れた地域で安心して暮らせる熊本づくり」を目指し、市町村、当事者団体や関係団体と連携し、様々な取り組みを進めている。
応募者	熊本県 健康福祉部 高齢者支援総室 認知症対策・地域ケア推進室 課長補佐 野尾 晴一郎
連絡先	〒862-8570 熊本市水前寺6丁目18番1号

（概要）

熊本県は、平成20年10月時点で高齢化率が25.1%と全国平均より高く、認知症高齢者は平成19年では約4万4千人と推計され、平成27年には約6万人に達する見込みです。そのため熊本県としては、認知症対策を県の重点施策の一つと位置付け、「認知症になってもできるだけ住み慣れた地域で安心して暮らせる熊本づくり」を目指し、市町村はもとより、当事者団体や医療、保健、介護、福祉等の関係団体と連携し、様々な取り組みを進めています。

【認知症対策の重点的な取り組みの推進（認知症対策の熊本モデルの創設等）】

本年度の上半期に、以下のような取り組みを行っています。

(1) 効果的な早期診断・診療体制の構築（熊本モデルの体制整備） - 認知症疾患医療センターを、地域での拠点機能を担う「地域拠点型」7カ所と、県全体を統括する「基幹型」1カ所の2層構造（「熊本モデル」）で設置し（全国最多）、本年7月から本格的に運用しています。

(2) 認知症コールセンターの設置 - 認知症の本人や家族が気軽に相談できる「認知症コールセンター」（愛称：認知症ほっとコール）を設置し、「認知症の人と家族の会」にその運営を委託し、本年7月から本格運用しています。

(3) 認知症サポーターの養成 - 昨年8月に蒲島知事が知事としては全国初の認知症サポーターになったことを契機に、養成の輪が飛躍的に広がり、昨年度だけで17,697人を養成しました。また、行政と関係団体が一体となって取り組みを進めた結果、本年度は認知症サポーターの養成に更に拍車がかかり、本年度上半期だけで、約1万4千人と前年度の約8割のサポーターを養成することができました。

熊本県における 認知症サポーター養成 数の推移	養成数	年度	H18年度	H19年度	H20年度	H21.4~9
	年度養成数 (対前年比)		2,682人 (-)	2,904人 (1.08)	17,697人 (16.4)	約14,000人 (0.79)
	累計		2,682人	5,586人	23,283人	約37,000人

(4) 認知症地域支援体制構築等推進事業の展開 - 本年度は、7市町村をモデル地域とし、全県的に展開しています。

(5) 関係団体と一体となった新たな啓発活動の実施

(1)~(4)の取り組みの効果をさらに高めるため、全県的な啓発活動を行うこととし、行政、当事者、医療、保健、介護、福祉等の23団体で実行委員会を立ち上げ、熊本市を主会場とした8市町村で、「認知症啓発キャンペーン2009inくまもと」を行うこととしました。

〔主会場（熊本市）における主な実施内容〕

日時	平成21年10月3日（土）14:00~
場所	熊本交通センター・センターコート、新市街、下通
実施 内容	開会セレモニー：認知症サポーター養成等功労者への感謝状等の贈呈等
	街頭啓発活動：知事・熊本市長をはじめ関係者等約250名で、繁華街のアーケード（新市街・下通）を往復し、認知症への理解を求める呼びかけ等を実施。
	ミニコンサート：樋口了一氏ミニライブ 山鹿市「せからしか劇団」による認知症に関する肥後にわか劇
	展示コーナー：認知症に関する啓発パネルの展示、認知症予防等に関するゲーム機等体験コーナーの設置
	認知症よろず相談会（認知症に関する悩み相談会の実施）
	シンポジウム〔崇城大学市民ホール・大会議室〕

【今後の展開】

今後も、「認知症になってもできるだけ住み慣れた地域で安心して暮らせる熊本づくり」を目指し、県民の方々の認知症に対する理解を深めながら、市町村や関係団体と更に連携を強化し、全国のモデルの一つとなるよう、認知症対策を進めていきたいと考えています。

活動名称	認知症を受け入れるということ ～若年性認知症を抱える夫妻と支援者との出会い～
活動要旨	若年性アルツハイマー型認知症の夫とその妻が、市の相談窓口を訪れたことをきっかけで、行政のサポートを受けながら、観光案内所でボランティアをしたり、全国各地で講演会を行ったりと、自分達が経験したことを伝える活動を行っている。
応募者	富士宮市サポートチーム / 佐野 光孝・明美
連絡先	〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町 150 番地 富士宮市保健福祉部福祉総合相談課 (窓口：村瀬様)

(概要)

【はじめに】

富士宮市認知症地域見守りネットワーク構築事業では、趣旨普及啓発や家族介護者支援について積極的に取り組んでいるところですが、中でも若年性認知症の支援については、どれだけの問題が社会に眠っているのかまったく把握ができず、突破口が何も見出せない状態でした。

そんな中、平成20年2月に若年性アルツハイマー型認知症を抱える佐野夫妻が初めて市の相談窓口を訪れ、関わっていく中で、私たちは多くのことに気づかされました。

「認知症になっても住み慣れた地域で自分らしく笑顔で暮らせる地域」を目指し、取り組みを進める中で、最も重要なことはそれら一つ一つが「誰のための取り組みなのか？」ということだと思えます。

- ・認知症を理解するとはどういうことか？
- ・認知症の方のために、その家族のために、私たちができ得ること、すべきことは何なのか？
- ・認知症の方とその家族への支援とは...当事者の声を聞くことからすべてが始まるのではないだろうか？
- ・働きたい。安心して出かけたい。楽しく暮らしたい。働き盛りの60歳、誰もが当たり前と思うこと。しかし、残念ながら今はそれができないもどかしい現実があります。

しかし、夫妻の切実な思いは、多くの人の心を突き動かし、人との繋がり、出会いや理解の中で、今この時を暮らしています。夫妻は「アルツハイマー型認知症」という医師からの突然の告知に、初めは、戸惑い、悩み、混乱し、精神的にも肉体的にも追い詰められてしまいます。しかし、やがて認知症という病気を正しく理解し、病気としてあるがまます受け入れていくようになります。そしてついに、自分たちが経験した絶望や苦悩...、そこから受容までの心の変化をありのまま伝える活動を「誰かのためになるのなら...」と挑戦する決意をしました。

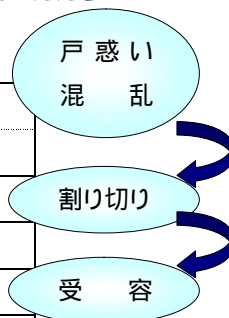
現在、観光案内所でのボランティアを続けながら、夫妻は、全国各地からのできる限りの依頼に応じて講演活動をしており、またその講演DVDは各地で開催される講座で使用されています。講演の参加者からは、毎回大きな反響を呼んでいます。

自分たちの活動によって、少しでも認知症への差別や偏見がなくなり、より多くの人の理解が得られますように...そしていつか「認知症になっても住み慣れた地域で自分らしく笑顔で暮らせる社会」が実現しますように...

そんな夫妻の思いがより多くの人の心に届きますように...。
<本原稿は、ご夫妻の活動についてお二人から話を伺い、サポートチームとしてまとめさせていただきました>

【夫妻の心の変化】

平成20年 2月	福祉相談窓口に来訪 観光案内所でボランティアを始める
平成20年12月	テレビ局取材
平成21年 4月	静岡新聞取材(連載記事掲載は6月)
平成21年 5月	介護保険事業者連絡協議会総会での初めての講演
全国各地からの依頼に応じて	DVDを使用した講座が各地で展開される。 講演活動を行っている。



活動名	ご近所を結ぶ「こまちゃん宅福便」
要旨	住民が会員となり相互に助け合う有償の生活支援事業。利用者と協力会員の調整を市社会福祉協議会が実施。誰もが生活の中で抱えている「困りごと」を、ご近所でカバーしあって安心して暮らしていける「支え合いの地域づくり」をすすめている。
応募者	社会福祉法人 駒ヶ根市社会福祉協議会 地域福祉振興係主任 梶田ひと美 /事務局長 片桐 美登
連絡先	〒399-4113 長野県駒ヶ根市梨の木2-25 ふれあいセンター内

(概要)

「こまちゃん宅福便」は、住民が会員となって相互に助け合う有償の生活支援事業であり、気軽に当たり前で地域で支え合える住民主体のしくみづくり、高齢者・障害者に限らず、誰もが生活の中で「困りごと」を抱えており、それを気軽にカバーしあって安心して楽しく暮らしていける「支え合いの地域づくり」「地域の支え合いづくり」を目的としている。気軽に「助けて」が言えて、「私で良かったら」「こんなことで良かったら」と力を出し合える関係をつくり、福祉臭くない、当たり前でしきみとして「近隣の支え合いのしきみ」をつくりたい、支える人と助けてもらう人を切り分けしないで、ある時は協力会員、ある時は利用者という互換性を大切にしたい、と考えている。

(1) 主な事業内容

- ・食材の買物、調理
- ・家屋、軽微な電気器具の修理
- ・寝具及び衣類の洗濯・補修及び洗濯物の日干し、取り込み
- ・手紙などの代筆、朗読、話し相手、見守りなど
- ・外出介助（散歩、買物、通院、会議、観劇などの付き添い）等

(2) 会員

市内に住む方なら年齢や家庭環境などに関係なく、誰でも利用できる。（登録料1000円）3歳から最高齢90歳まで、多様な人材が登録している。ヘルパーをしながら、もう一方でヘルパーでは出来ないきめ細かな対応をしたいと考えて協力会員に登録している人も少なからずいる。

(3) 利用者との関係性

利用者からは、気軽に色々なことを自分の生活に合った日時に頼むことができる。サポートしてくれる協力会員は自分が見込んだ気の合う特定の人であることから、口げんかできる程に信頼関係が育っている（お友達になる）。二回目以降は両者にお任せ、直接やり取り。支援の目的はお友達づくりであり、支え合い復活のお手伝いである。「福祉のお世話になりたくない」という声もあるため、“福祉くささない宅急便感覚”を意識。

(4) 大切なコーディネーターの役割

- ・その後の両者の見守りが大切である（そっと影で見守る）
- ・出会いを大切に、利用者、協力者とも個人的関係になる（友達づくり）
- ・コーディネーター自身もサービスに加わる（友人として）
- ・あらゆる場所で情報収集（友人づくり、協力者発掘に必要）
- ・利用者を担い手にする（利用者も元気にしたい。宅福便は支え合いづくり）
- ・自立支援（元気になったら自分でがんばってね）
- ・協力者づくり（地域に担い手を育成し、ご近所の会員にお任せ）
- ・利用者と協力者をお友達関係にする

活動名称	自立と尊厳を保ち、安心して住み続けることのできる地域へ ～ホスピスケアの理念を共有した「ケアタウン小平」の取り組み～
活動要旨	複数の事業者が同じ建物の中にある利点を活かし、地域住民の協力を得ながら、さまざまな困難に直面している人々を支援している。医療、福祉、教育等の事業を通して、安心して住み続ける地域づくりを目指している。
応募者	NPO法人コミュニティケアリンク東京 事務局長 中川 稔進
連絡先	〒187-0012 東京都小平市御幸町 131-5

(概要)

NPO法人コミュニティケアリンク東京は、“ケアタウン小平”にて一般市民を対象に、がんなどの終末期にある方など地域社会でさまざまな困難に直面している人々を支援し、医療、福祉、教育等の事業を通して、安心して住み続けることのできる地域社会づくりを目指し、デイサービス、訪問看護、食事サービス、文化・スポーツ倶楽部、子育て支援、ボランティア育成、医療や福祉の各種講演会、地域交流の企画運営等を行っています。“ケアタウン小平”は3階建ての建物に4つの事業体 - (有)暁記念交流基金(土地と建物の管理運用、賃貸アパートの運営) ケアタウン小平クリニック(在宅療養支援診療所) NPO法人コミュニティケアリンク東京(訪問看護ステーション、デイサービス等) ㈱クロスケア(ヘルパーステーション)が入っています。

の暁記念交流基金がケアタウン小平の開設者で大家さんです。そして賃貸アパート「いつぶく荘」に住む入居者や～の事業体は、いわゆる店子で、家賃を支払い、ケアタウン小平を拠点にして事業を営みます。いつぶく荘の入居者は必要に応じて医療や介護のサポートを受けながら自分なりの生活を営みます。ケアタウン小平は何かしらのケアを必要とする人や、ケアを提供する専門家・ボランティアが相互につながる「場」であり、ホスピスケアでの経験を活かして、医療・介護・暮らし方の新しいモデルを実践しています。その中核として活動しているのが当法人です。

在宅ケアにおける従来型のネットワークでは、複数の事業者の拠点が異なるため、細やかな情報の共有がスムーズではなく、ホスピスケアに大切なチームケアを提供することが困難なこともあります。しかし「ケアタウン型チーム」は、各事業所の拠点が同じ建物にあるため異なる時間に一人の利用者を訪問しても、速やかに情報を共有し、質の高いチームケアを提供することができます。つまり、私たちのチームはホスピスケアの理念を共有しながら動くことができるのです。

ケアタウン小平の活動が始まって4年間、小平市及び近隣市で私たちが在宅ケアを提供した患者さんのうち約300名が亡くなっていますが、内約70%の214名が在宅で最期まで過ごすことができました(ガン174名、非ガン40名)。きめ細やかなホスピスケアの提供により可能となった数値といえるでしょう。地域に在宅療養を望む方が潜在的に多いことも改めて実感しています。

私たちの活動には、地域のボランティアの協力が欠かせません。専門家だけで提供するケアには制度及び職種が持つ能力の限界があり、その隙間を地域のボランティアさんと協働することで埋めています。また、子育て支援事業として、大人と子どもが定期的集う遊びの会などを開いています。ケアタウン小平には日常的に子どもの声が響き、ここで子どもたちが小さい時から互いに支え合うことの大切さを学び、次世代へコミュニティケアを再生産することができれば幸いです。

自分の存在の不確かさや心や体の痛みや苦悩は、なにも病気の人だけが抱えているものではありません。健康な人もそうでない人も、お互いに支え合うことが必要です。当法人の事業を通して互いに支え合い、コミュニティケアを実現していきたいと考えます。

活動名称	サロン・コミュニティカフェを通じた地域の支えあい、助け合い活動
活動要旨	「住み慣れた地域で最期まで暮らし続けられる」ことを目標に自主事業の“たすけあいサービス”や“サロン活動”など約20の事業を行う。介護保険事業だけでなく世代間をまたがった地域コミュニティづくりの活動を進めている。
応募者	特定非営利活動法人 フェリスモンテ 山王丸 由紀子
連絡先	〒535-0003 大阪府大阪市旭区中宮 4-11-30

(概要)

大阪市の東北部旭区で「住み慣れた地域で最期まで暮らし続けられるように」を理念に、1999年に特定非営利活動法人(NPO)の認証を受けました。近くには大阪を代表する商店街の一つ、千林商店街があります。徐々に事業規模が大きくなり、旭区の千林・中宮・太子橋地域、生野区の今里地域で約20事業を展開しています。事業内容は、介護保険事業だけでなく、市から委託された配食サービス、発足当初からの自主事業“たすけあいサービス”や“サロン活動”をはじめ、独自のグループハウスやコミュニティカフェの運営などを行なっています。

当法人では、一昨年度より高齢者がいつでも集うことができるサロンとして、太子橋地域に常設サロン(コミュニティカフェ)「花しょうぶ」を開設しました。「花しょうぶ」は、月曜日から土曜日、10:00~16:00を営業時間とし、近隣に住むお年寄りの方をはじめ、小さなお子さんを持つ母親や近隣の学生などがここを訪れ、多世代に渡った交流の場になっています。その素地となった活動が「おたっしゃサロン」であり、これはスタッフが直接高齢者のお宅に出向いてサロンを行なうものです。

一方、サロン活動とは別に中宮事業所では学ぶことを目的とした詩吟教室・大正琴教室・謡曲教室などの「おたっしゃ倶楽部」を定期的で開催しています。また、これらの事業で培った地域でのネットワークとそのノウハウを活かし、最近では商店街の空き店舗を利用した新たな居場所づくりを進めています。

認知症があってもなくても、障害があってもなくても、その人がその人らしく「住み慣れた地域で最期まで暮らし続けられる」ことを目標に、世代間を跨った地域コミュニティづくりに焦点を当てた活動を進めています。

(活動の成果)

活動を通じて、地域に暮らす様々な人がつながり“困ったときにはお互い様”と助け合える環境作りが大切であると確認するとともに、世代をつなぐためのコーディネートの実践が大切であると感じています。また、これらの事業で培った地域でのネットワークとそのノウハウを活かし、今市商店街に新たな居場所づくりを進めており、高齢者がその人らしく「住み慣れた地域で最期まで暮らし続けられる」ために、地域コミュニティづくりに焦点を当てた活動を重ねていく予定です。

活動名称	お年寄りの“自分語り”に寄り添い、元気を！ - 傾聴ボランティアのめざす住みよい町づくり -
活動要旨	お話し相手として心のケアをするという、福祉サービスの新たな分野「傾聴ボランティア活動」を学んだ仲間が、ボランティアグループを結成。高齢化のすすむ地域のお年寄りたちに、暗闇にさす光のように生きる元気を贈りたいと取り組んでいる。
応募者	傾聴ボランティア佐賀かたらい 副会長 西村 緑
連絡先	〒840-0801 佐賀県佐賀市駅前中央 3-7-1-703

(概要)

いま、町なかでよく耳にするヒーリングミュージック“手紙”。親愛なる子供たちへとサブタイトルのついた、やや冗長きみの言葉になぜかふと涙をさそわれてしまう。原作者は不詳。忙しさが増し、ゆっくりコミュニケーションさえできないいまの時代、この老いた母の、縋りたいような気持ち、遠のいていく記憶に寄り添えるひとは何人いるだろうか。高齢化が右肩上がりで進む現代、認知症はもはやひとごとではない。支える側が支えられるときが、もうすぐ傍まで迫っている。元気な高齢者が、自分の持つ余裕の時間と力を同世代の高齢者の心のケアをすることで、本人も生きがい感を持ちイキイキ生きる新種のボランティア活動を表と箇条書きに纏めた。

1) 新たな分野のボランティア活動の呼びかけ

佐賀市社会福祉協議会は、平成18年度の赤い羽根共同募金事業として、「聴くことでできる社会貢献」を企画。広報などで市民に広く参加を呼びかけた。発端は、藤佐裕史氏(現、地域福祉課課長)が当時、「傾聴ボランティアについて～心の声が聞こえていますか?」というテーマの鈴木絹英氏の講演を聞き、感動し、「傾聴ボランティア養成短期集中講座」を実現したという。

2) 傾聴ボランティア養成短期集中講座開催と“佐賀かたらい”の立ち上げ

9月29日から10月2日の4日間、の研修はハードな上に、社協が企画するボランティア講座としては高額となる5千円の参加費にも関わらず34人が応募、全員が50歳以上の男女が受講第1期生としてひとりも欠けるをなく全員、研修を修了。「これならできる!」と、藤佐氏を動かした鈴木絹英氏の熱い思いは、参加者みんなの心も釘付けにした。終了後、直ちにボランティアグループ結成に向けて自主的に役員・規約・活動内容など社協の助言指導を受けながら話し合いを重ね、翌年3月に“傾聴ボランティア佐賀かたらい”立ち上げに至った。

3) 具体的な活動の始まりと組織作り

19年5月より「かたらい」による施設及び在宅訪問活動が始まった。高齢者は、みなそれぞれに状況は異なり、認知症や失語症、盲目の方々もいて学び始めたばかりの傾聴スキルをもとに、落ち込み戸惑う会員も。そんな時、月1回の定例会で行うお互いの体験交流(ピア・サポート)で癒し合う。お話し相手として心のケアをするという、福祉サービスの新たな分野として、地域に根ざした傾聴ボランティア活動の道のりは厳しく遠い。お互いの情報交換と活動の拡がりのための機関紙「かたらい」を年2回発行。現在、創刊から5号まで出している。

4) 1期・3期生の誕生から福祉助成金による自主企画へ

12月14日～17日、第2期傾聴ボランティア養成短期集中講座開催。24名の2期生と3期生を併せて会員は70余名となる。平成21年度から助成金申請による自主企画プラン活動へ。訪問施設も3ヶ所から8ヶ所に増。在宅傾聴要請も増える中、認知症への学びや公開講座の実施など忙しくなりそうである。

活動名称	「第一歩が踏み出せた！わが町も『安心して暮らせる町』に変身中。」
活動要旨	「認知症サポーター『0（ゼロ）』地域」であった町だが、もともとボランティア活動が盛んな地域であり、民生委員等の後押しを受けて社会福祉協議会が認知症サポーター養成講座を開催。若い世代への広報活動も視野に入れながら地道に活動を展開。
応募者	社会福祉法人江北町社会福祉協議会 白石 学
連絡先	〒849-0501 佐賀県杵島郡江北町大字山口 2645 番地 1

（概要）

「認知症サポーター『0（ゼロ）』地域」の新聞一面記事の中にわが町の名前を発見し愕然とし驚きました。折しも、民生委員の方や事務局長からの後押しもあり「江北町を“どがんないか、せんばいかん。”（何とかしないとイケない。）」と言う気持ちに駆り立てられ、社会福祉協議会職員が「認知症サポーター『キャラバンメイト』の研修会」に参加させて頂きました（遅すぎたかもしれませんが・・・）。平成の大合併も行わず、一つの小さな町だからこそ「地域の深い『絆』が出来やすい」と考え、とにかく第一歩を踏み出す為に出来ることを行なおうとキャラバンメイトの研修も夢中になりました。

無事に研修も終了し、「さあ、サポーターを育成していくぞ!」と言ったところまでは良かったのですが、「誰を対象者にするの?」と自問自答した時に、本当に話を聞いてくれるのかという不安が先に横切り、対象者の選定に悩みました。でも、『安心して暮らせる町』に変身する為に「住民全てが変わることが必要だ!」と言う事が大切であると考え、対象者を選定するのではなく、依頼があれば何処までもパソコン・スクリーン・マイクの道具を両手に抱えて出前講座を開始することにしました。

第一回目は「シルバーボランティアヘルパー」、二回目「江北町ボランティア協議会役員」、三回目「民生児童委員会」と回数を重ね、四回目は企業より連絡あり「JAボランティアすいれんの会」に出前講座を開催することが出来ました。お話をさせて頂いた事で、「認知症」のことを少しでも理解していただけたかなと思います。聴講して頂いた方からは、「中学生にもわかりやすいから説明されたら?」「グループホームに慰問に行くので、どういう風に接したらいいのかという不安がなくなりました。」「自分たちも歳をとっていくが、知っておく必要がありました」との声を聞くことが出来ました。「認知症」を深く説明することは出来なかったかもしれませんが、事例の紹介をしたり、認知症状の方との接し方・家族への関わり方・症状の説明等を話し、サポーターの必要性を紐解きながら講義の時間を有意義に活用させて頂きました。

今はまだ地道な活動ですが、行政からも声がかかり立ち上がっていただく事が出来ましたし、講座の依頼も増加しています。地域では「子供見守り隊」という活動がありますが、今度は「老人見守ろう会」でも出来るように活動し、若い世代への広報活動も視野に入れながら、「誰でもが住み慣れた家で、安心して暮らせる町」を目指し、ヨチヨチ歩きが一步・二歩・三歩と進めるように活動していく予定です。

活動名称	つながれた人の輪を継続的に支援し、あきらめない地域づくり
活動要旨	認知症の理解がまだ十分といえない現状で、認知症を正しく知ることの効果や知ることを受け入れられない人の心理に丁寧に触れながら、サポーター養成を含む啓発活動や地域ネットワーク構築によりコミュニティ支援をすすめている。
応募者	甲府市地域包括支援センター奥湯村園 佐藤 治美（認知症ケア地域推進員）
連絡先	〒400-0071 山梨県甲府市羽黒町 1657-5

（概要）

平成18年4月「甲府市地域包括支援センター奥湯村園」を開設した。従来の在宅介護支援センターは休止となり、甲府市から委託された10センターが始動した。

「地域包括ケア」とは何か、センターの名称になかなかなじまない地域住民との距離感を感じながらも高齢者の総合相談は窓口徐徐に寄せられ、担当地域の特性は生活の場への訪問相談の積み重ねで、実態が少しずつ見えてきたところである。

当センターの担当地区でも認知症への対応について年々相談が増加している。地域の高齢者が認知症という言葉におびえている実情を知らせようと認知症サポーター養成講座を進めている。しかしまだまだ理解が十分とは言えない現状がある。

地域包括支援センターとして、認知症ケアをいろいろな角度で周知、正しく対応する方法をセンター設置から3年半を経過して、できていることを尊び新たな活動のヒントを得るといふ知恵を地域の方々からいただいた。

B地区では従来の婦人部の集まりや立ち上げて数年の見守りボランティア組織が日々取り組む中で困難な問題にぶつかりながら、正しい知識と解決の実体験を重ねることで新たな問題にも意欲的に取り組んで行く力を生むということが分かってきたのである。

「人間として考え、実践して解決する力は、正しい情報を得ることから生まれる。」と信じ「認知症を正しく知る」という情報はどのように人の活動を変化させるのか、また「認知症を知ることを拒否し変化しようとしぬ人たちの心理」にも触れながら実践を積み重ねていくこととした。

当センターは18年11月に初認知症サポーター養成を開催し、サポーター養成講座の開催の工夫や苦勞を他のセンターの仲間に伝えた。次年度には認知症キャラバンメイトの同志が増え、10センターがそれぞれの地域でサポーター養成を始めていくことになった。特にモデル地域でもなければ、少ない予算での活動であったが、地域包括職員の認知症ケア理解啓発活動へのモチベーションが上がっていった。

その中で当センターでは、21年度これまで種をまいた認知症の正しい知識によって人の輪をつながっていくことを自治会回覧という媒体を活用して地域住民に周知し、見えるネットワーク構築に向けて始動したのである。